擬古文新選全

3759
Se14
資料室

42618
教科書文庫
4
810
51-1930
20000
54727

資料室

昭和五年十月九日
文部省檢定濟
師範學校・中學校・高等女學校用

擬古文新選 全

千田憲編

東京 右文書院藏版

375.9
Se14

酒井抱一筆

花と月

広島大学
教
54727
図書

緒言

一、本書は中等程度の諸學校に於ける補習用國語讀本として編纂したるものなり。

一、本書は、近世國學の名家中、最も尤なる、中島廣足・藤井高尙・清水濱臣・村田春海・加藤千蔭・本居宣長・賀茂眞淵の七家の文集中より、前項の目的に恰當する文章を採錄せり。

一、本書は、生徒をして、講讀と共に明治維新の原動力たる國學の史的位置をも知らせんため倒序的に配列せり。

一、本書に採錄したる文章は、主として、左の趣旨に據れり。

イ　各家の國體觀及び復古的精神の顯著に表れたるもの。

ロ　各家の文學觀及び學問に對する態度の明らかにうかゞはる

るもの。

ハ　敬神崇祖の思想の濃厚なるもの。

ニ　人情美、自然美に對して讃嘆の念を起させ得るもの。

ホ　各家の文藻を見るに足るもの。

一、本書は、生徒の理解に資するため、頭註を施したり。但し、頭註は重要なるものに止め、簡潔を旨とせり。

一、本書の挿畫は、各家の人物を髣髴せしむる筆跡又は肖像、或はその文章の鑑賞を資くるに足る、美術上名のある繪畫を以てせり。

昭和四年十一月

編者識

擬古文新選　目次

中島廣足

一　春の月……一
二　閑中の春雨……二
三　燕……三
四　蚊遣火……四
五　夏草……五
六　夏の旅……六
七　秋の山……七
八　山路の菊……八
九　氷……九
一〇　山家の雪……一〇

一一 冬の月……一二
一二 埋火……一四
一三 夜學……一五
一四 書……一六
一五 燈火……一七
一六 夕……一八
一七 驛……一九
一八 山家の興……二〇
一九 瀧……二一
二〇 漁村……二二
二一 近水樓の記……二四

藤井高尚……二六

一 花……二七
二 胡蝶……二七

三 山の春の月……二九
四 新樹……三〇
五 賀茂祭……三〇
六 夕立……三二
七 荻の風……三三
八 秋の田……三四
九 菊……三五
一〇 初冬の山家……三六
一一 竹の屋の詞……三七
一二 松……三八
一三 鶴……三九
一四 相撲……四〇

清水濱臣……四五

一 花に寄する祝言……四六

二 水雞……五一
三 萩をめづる詞……五一
四 砧を聞く……五四
五 落葉……五五
六 漁父の辭……五五
七 琴後集の序……五六
八 縣居翁の墓參會に……六〇
九 筆の跡を見て亡き人を偲ぶ……六三
一〇 推敲……六四
一一 健やかならぬはくちをし……六七
一二 和歌と俳諧……六九
一三 埋火……七一
一四 富士の嶺をよめる歌……七三
村田春海……七七

一 自序……七八
二 山里に花を見る……八〇
三 花を惜しむ記……八二
四 初雁……八五
五 芳宜園にて曇る夜の月を見る記……八七
六 秋の山ぶみ……八八
七 山水のかた書ける繪を見て……九四
八 安田躬弦の家の文臺の記……九六
九 隨時樓の記……九八
一〇 知足庵の記……一〇〇
一一 泊酒舍の記……一〇一
一二 對月言志……一〇三
一三 雪をめでて……一〇五
一四 月花のあはれ……一〇八

一五　芳宜園大人の靈を祭る……一一〇
一六　伴蒿蹊に送る……一一四
一七　正月ばかり山里人の許へ……一一五
一八　上田秋成が許へ……一一六

加藤千蔭……一一八

一　父の歌集……一一九
二　縣居の翁……一二二
三　紅梅をめづる辭……一二六
四　泊酒舍にて蓮を見る辭……一二八
五　初雁を聞く辭……一三一
六　蟲選の辭……一三四
七　石濱の雨……一三五
八　秋のおもひ……一三八
九　山里の月……一四〇

一〇　山水のかた寫したる繪を見る……一四一

本居宣長……一四四

一　花の雪……一四六
二　忘れ草……一四六
三　學問……一四七
四　わがをしへ子に戒めおくやう……一四九
五　道のひめごと……一五〇
六　書うつし物かくこと……一五一
七　兼好法師が詞のあげつらひ……一五三
八　しづかなる山林を住みよしといふ事……一五五
九　富貴を願はざるをよき事にする論……一五六
一〇　後の世は恥づかしきものなる事……一五七
一一　古よりも後世のまされる事……一五八
一二　月前の納涼……一六〇

一三 初冬の時雨……一六三
一四 加藤千蔭に答ふる書……一六四
一五 吉野……一六八
一六 水分の神……一七七
賀茂眞淵……一八二
一 隅田川に舟を泛べて月をもてあそぶ序……一八三
二 九月十三夜宴橘枝直宅歌序……一八五
三 村田春郷墓碑……一八八
四 岡部日記……一九〇
五 佛足石の記……二〇二

目次終

中島廣足

檀園と號し、田翁、黄口等の別號あり。肥後熊本藩士にして、小姓役を勤め、二百石を食みしが、病に依りて早く致仕し、長瀨眞幸に就いて專ら國學を研究す。三十歳頃より長崎に來り住み、家塾を開き、門弟に教授すること二十年餘に及ぶ。後、大阪に移り、帷を下して後進を誘掖す。文久元年、熊本藩にては、かゝる國學の大家を他郷に客寓せしむべからずとし、召喚して、藩の國學師範を命ず。元治元年歿す、年七十三。

檀園文集、初め天保年間に出版せられ、三卷なりしが、明治二十六年、これに遺文を追加して、新に序・跋・記・物語・墓碑・雜に分類採錄し、一冊本となして刊行せり。文章は筆致遒勁にして秩序整然たり。

一　春の月

梅はとくうつろひて、櫻はまだしき程、つれ〴〵とながめ暮したる空に、めづらしくさし出でたる月のにほひ深う、そこはかとなく霞みあひたる梢どもの、いとどなまめかしう身にしみて覺ゆるは、げにしくものもなき夜のさまになむ。「かやうなる夜に、思ふ人と山里わたりあくがれありかむに、彼方よりも笛吹きすさびなどしつゝ來あひたるけしきも覺束なき程の月影、いかになまめかしうをかしかりなましなど、あらましごとに思ひつゞくるも、あいなきすき心なりや。

更けゆく風はまだいと寒きに、簾はおろしたれど、いもねられず。やう〳〵夜も短きほど覺えて、山寺の鐘の音におどろき顏なる鴉の聲もをかしう聞ゆ。またも立出でて見れば、入方の空はましていと深う霞みて、月の行方もたど〳〵しきに、すこしあかりゆく山ぎはのけしきは、まことに千々の黃金にもかへつべくなむ。

—「樞園文集」—

しくものもなき夜
「照りもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」（新古今集、大江千里）

二　閑中の春雨

花ざかりは更なり、さらでも柳など青やかにうち煙り、うら〳〵と照りたる日は蕨・土筆などいかならむと、野山のさまのみゆかしく思ひやられて、庵の中には籠りゐ難きを、人さへゆくりなく訪ひ來つゝ、近きわたりまでいざ〳〵などそゝのかすめり。

雨の降る日は、さることも思ひ絶えて、人はた音づれねば、文机にのみよりゐたる、なか〳〵にをかしうなむ。萱ふける軒は雨の音靜かにて、池水のあやこまかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをか

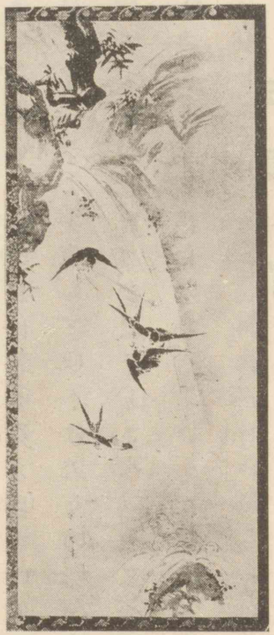
し。

暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹きいでて、燈臺の火のまたゝきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。—「橿園文集」—

春雨（横山大觀筆）

三　燕

いとうらゝかなる日、思ふどちうちつれゆく大路に、つばくらめのこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕へつべくていとをかし。雨のなごりのなほかわかぬ方などに下りゐて、ひぢを含みつゝ、わらはべの走りくるに驚き立ちて、遠く翔りゆくもをかし。梁に巣くひて、いつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ鳴きさわぎたるさまは、いみじうこそあはれなれ。—「橿園文集」—



燕（英一蝶筆）

四　蚊遣火

晝のほどの暑けさは、水の上さへむとくにて、いと耐へ難かりし

を、やう〳〵日影もかたぶきて、木の間よりそよぎ出づる風のいと涼しきに、ゆあみなどして立ちいづれば、月の影さへほのめきて、晝の苦しさも、かつ〴〵わすられぬ。

やゝ遠くゆくほど、道の傍なるしづが伏屋より、烟のいとしげく立上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きなる火桶に、何にかあらむ青やかなる木の葉をいと多くさし入れて、こなたかなたあふぎちらすはいとあつかはしく、見る目もいぶせくて、急ぎ歩みすぎて見れば、やう〳〵薄らぎゆくけぶりの、杉の梢にたなびきたる、霞おぼえてをかしきに、かはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にも書かまほしき景色になむ。

―「榲園文集」―

五　夏草

世をへだてたる住家は、庭の草だにかき拂はぬを、夏來てはいと

ど茂りそひて、野べもひとつに踏みわけがたくぞなりにたる。いづら三つの逕はと、辿りくる人もなければ、つく〴〵とながめ居るに、撫子・さ百合などの植ゑもせぬが、こゝかしこ咲きまじりたるもをかしきを、雨うち降りてこぼるゝ露のいとしげきは、見る目も涼しく、いぶせき心も慰みぬべし。

やう〳〵夏ふかくなり行くまゝに、夕つかたなど、ほのかに蟲のこゑの聞ゆるは、秋來たらむ後、いかばかりならむと思はるゝに、拂はぬ草もかひありてなむ。

―「榲園文集」―

六　夏の旅

晝のまは暑さ堪へがたくて、はか〴〵しうもえあゆまねば、朝影の程にこそはとて、鳥の聲とともに起きいでて行くに、有明の月くまなく澄みわたり、並木の松風涼しく吹きとほりて、ほろ〳〵とこ

ぼるゝ露の袂にかゝれるも、いと心地よし。道のかたへなる田の面に人の音なひのするを、何かと見れば、車の上に登りゐて、水蹈み入るゝなりけり。我が旅のうさも聊かなぐさみぬ。

程なく明けゆく横雲の空に、山鴉飛びわたりつゝ、茅蜩の鳴きいでたるなど、いみじうをかしきに、稻葉の露の所せきまで置きわたしたるが、葉末に上りてかつ〳〵こぼるゝさま、見る目もいと涼しくおぼゆ。さし出でたる日影のやう〳〵高くなりゆくに、けふ越ゆべきなにがしの山路思ひやるも、まづいとくるしうこそ。

—「樞園文集」—

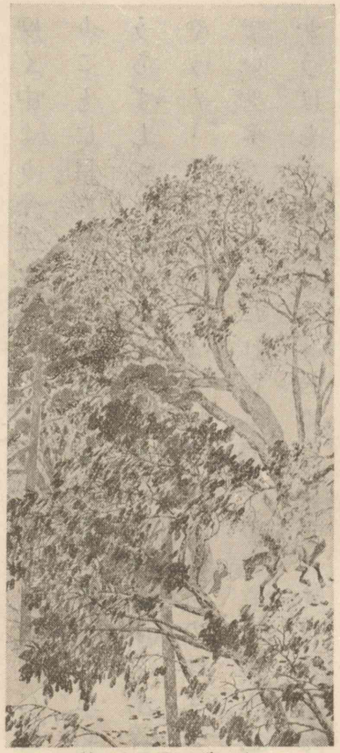
七　秋の山

雨すこしうちそゝげど、かばかり思ひ立ちつることはとて、うちつれいづ。降るともなく霽れぬるは、この頃の空のならひなめり。

二月の花より「霜葉紅ニ於二月花一」（杜牧）

いとしげき草葉の露をふみ分けゆくも、あながちなる山路なりや。思ひしもしるく、いと濃く染めわたしたる紅葉の、霧の絶えまより見えたるけしき、二月の花よりもとかいひけむやうに、あはれふかう身にしみて覺ゆるに、夕風寒く吹きのぼる谷のあなたに、いと細き聲にて遙かにうち鳴きたるは、鹿なりけりと思ふに、いと珍らしく、人々耳立てたる程、二聲三聲鳴きそへたる、あはれいみじき山蹈みのかひよと思ふに、おくれし人々もなつかしくなりぬ。

—「樞園文集」—



山路（横山大觀筆）

八　山路の菊

木々の紅葉むら〳〵染めわたして、尾花が袖も人待ち顔にうち招く山道のいとおもしろきに、女郎花・蘭などのやう〳〵うち枯れゆく中より、今咲きそめたる菊の、露もとをゝに靡きいでたる、物よりことに目に立ちて、いとなつかしう覺ゆ。「*この花開きて後」などうちずしつゝ、さかしき岩根を傳ひ登るほど、水音さへさやかにて、やう〳〵山深くなるまゝに、谷川の流、岩のはざまなど、異草も交らでいと多く咲きみだれたる、濃き薄きさま〴〵色をつくして、いとかうばしく、波にぬるゝ枝さしさへもあはれになつかしきは、まことに仙人の住家に來たる心地なむせらるゝ。

—「檀園文集」—

*この花開きて後　「不二是花中偏愛菊一。此花開後更無レ花。」（和漢朗詠集）

九　冰

萩の葉音もうらさびて、ふけゆく夜風のいたう寒きに、とひくる人もなければ、衾引きかづきうちふしたるが、とみにもいねられぬぞ、老のさがなめる。炭櫃の火もたえ〴〵にて、いと長き夜のわびしきに、板戸のひまのやう〳〵しらみゆくは、あけぬなめりといと嬉しく、やをら起きいでて開きみれば、有明の月のさしいでたるなりけり。

庭の落葉も霜深く見えて、筧の音のほのかになりぬるは、こほりやしぬらむと、こゝろみに水瓶の瓢とりてひきあぐれば、手にもさはらず、碎けたる冰の、いさゝかつきて上りたるが、月の光にきらめきたる、いと珍らかにをかしうなむ。

—「檀園文集」—

一〇　山家の雪

暮れわたる峰の松風吹きしきりて、いといたう寒きに、例の火桶

かきいだき麻ぶすまひきつゝうち臥しをるに、軒のひま〳〵より吹きいるゝ風につれて、頭の上に何にかあらむいと冷かに散りくるは、雪降りいでたるにやと思ふほど、窓の戸にさとふゞきかくる音のいと烈しく、すゞろに心すごき夜のさまなるに、慣れにしすまひもたへがたう覺ゆ。

やう〳〵風靜まりて、下をれゆく竹の音のをり〳〵聞ゆるは、いかばかり積れるにかと心もとなきに、窓の戸おし開き見れば、有明の月さし出でて、軒端の山も麓の野邊も一つにうづもれたる、くまなき光の雪にはえて、えもいはずをかしきに、あはれ都の人にと思ふもかひなくなむ。

—「樞園文集」—

二　冬の月

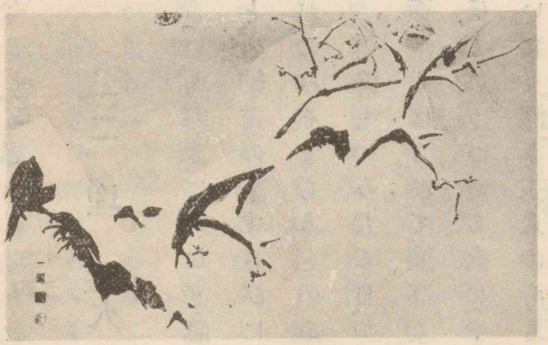
思ふどちまどゐして、うづみ火かきおこし、心へだてなく物語す

徒らに寢て
「かくばかりをしと思ふ夜をいたづらに寢てあかすらむ人さへぞうき」（古今集、凡河内躬恒）

すさまじと云云
「すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けくすめる二十日あまりの空こそ心細きものなれ。」（徒然草）

興盡きて反る
「吾本乘興而來、興盡而反、何必見安道耶。」（晉書。）

るに、いつしかさゆる夜のけはひも忘られて、窓の戸おしあくれば、宵の浮雲なごりなくはれて、雪少し降りたる庭に、月のさやかに照りたるが、いはむ方なくおもしろきを、「かくてのみやはあるべき、徒らに寢てあかすらむあたりをも驚かしてむ。」と、やがてうちつれつゝあくがれ出づ。



月下雪梅　（森一鳳筆）

人の行きかひも絶えたる大路の、凍りわたれるをふみならす足音、我ながらいとをかしく覺ゆ。「かゝる月夜をしも、すさまじといひけむ昔の人こそ心得ね。」など、いひしろひつゝ、やゝ遠くあくがるゝに、風のいとさむく、身にしみて堪へがたければ、「興盡きて反る。」といへる故事もあなるものを

とて、各、立ちかへるに、「夏ならましかば、尙いづこまでかは、あくがれなまし。」と思ふも、いとをかしくなむ。

—「榲園文集」—

一二　埋火

「いと寒きに火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつき〴〵し。」と、少納言の筆すさびに物せられたる、げにさることにて、冬は只これのみぞ、まらうどのあるじまうけにもなりぬめり。

雪降りつみたる日、かねてちぎりしをとふに、思ひしごとくに、南面清くはらひて、簾高く捲きあげたり。大きやかなる火桶のよきほどにうづめる火に、やがてさし向ひたる心地いみじううれしく、いたり深き主人の心も思ひ知られぬ。かくて何くれの物語するほど、尙炭をとて取りいでたる、手づからさしそふるもをかしきに、大きやかなる齒固など取出して、「やがてこれにて燒きてこそは。」と

少納言　清少納言。

いふに、雪のさむけさもかつ〴〵忘られてなむ。

—「榲園文集」—

一三　夜學

寺々の初夜の鐘のひゞきもをさまりて、皆人も寢たるに、いとうれしう、燈火あかくなして、文机に打向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何ごころなくて過ぎにしも思ひ知られて、深き心ばへあるくだりくだりも、おのづから解きえらるかし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつゝ見もてゆくに、遠き世の人もたゞさしむかひ語らふ心地す。さうしつくりて、をかしきふし〴〵、あるはふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつゝ書きつけなどするもをかし。

とりの聲は夜深きにやと思ふに、いととく明けはなれたる、しばしとて打ちねぶる夢のうちも、あだしごとならむやは。—「榲園文集」—

一四　書

夏の日の暮れがたきをも知らず、冬の夜の長きをも覺えぬは、書見る心の樂しさになむありける。さるは道々しき筋のはさらなり、家々に記せる何くれのふみ、又かりそめの筆すさびなど、いとさまざま多かる中に、わが立てたる筋ならぬも、見もて行くまゝには、用ある事どもありて、かにかくに飽かず面白く樂しきは、書に如くもの又なかりけり。

遠き世のを見るほどは、我もその世にある心地して、やがてその人々を友となして打語らふ心地さへせらるゝを、我も筆とりて、よしなしごとども書きつくるが、たま〳〵も散りぼひ殘りて、後の世に傳はらば、今の古を見るが如く、後の人はた我を友とせむには、千年の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなむ覺ゆる。

鈴屋翁
本居宣長。

よろづの心やれるわざ、いとさはなれど、たゞひとりゐてあかず樂しきは、書の外に又何かはあらむ。「あるが上にもあらまほしきは書なりけり。」と鈴屋翁のいはれたるはげにさることにこそ。

—「樞園文集」—

一五　燈　火

いと廣き殿のうちにくま〳〵しき所もなく、數多かゝげたる燈火の光は、心もはれ〳〵しうこそ覺ゆれ。文机のもとなるはさらなり、友だちうちつどひて近うかゝげたるいとをかし。

夜深き雨の音に驚きたる枕がみに、影かすかにまたゝきたる、いみじう心細し。

山里の火影こそいみじうあはれなれ。隣とたのむも遠く隔りて、竹の中などよりすきて見えたる、いとあはれなり。

あまのすみかは晝にも似ず靜かなるに、あやしげなる窓よりもりくる影は、網を結ぶにやと思ふもいとをかし。

―「樞園文集」―

一六　夕

遠山寺の入相の鐘、ねぐらにかへる夕鴉も、いつしか聲しづまりて、むかへる文卷もやう〳〵見えずなりゆくに、心ゆくわたりはいと口惜しきものから、しばし打ちおきて、はしつ方に出づれば、暮れのこれる梢どものほのかなる山のはに、僅かにあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。

青鷺とかやいふ鳥の、あやしき聲に啼きゆくが、何となく物寂しげなるを、來むといひつる友はた暮れすぐしてやと思ふも心もとなきに、燈火かゝげたるこそまづ嬉しけれ。

―「樞園文集」―

一七　驛

治れる世は、驛路のゆきかひも賑はゝしく、人宿す家はた建てつづけて、草引きむすぶ思ひもなきものから、さすがにうちとけてしも寢られぬは、旅路の習なるべし。

曉の鐘はいづこも同じ響にて、いととく立ちいづる旅籠馬のこゑごゑ、枕上に聞えて心地よげなるに、「今日は天氣もよかんなり。何がしの浦の眺めいかにをかしからまし。かしこの御社にもこたびこそは。」などいひつゝ、さゝやく音のほのかに聞ゆるは、あなたに寢たる旅人なるべし。家なる人々も起きいでて、朝食のことなどとかくまかなひありく程、やう〳〵物さわがしくなりて、物擔ひゆく男どもの俚謠うたふなど、忙はしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとに引きよせつゝ、「馬まゐりて候。」といふは、吾が乘るべきに

やと思ふもいとをかし。

一八　山家の興

山里のすまひはさびしきやうなれど、さる方に馴れぬれば、なかなかにをかしうなむ。さるは花・紅葉の色香は更なり、鳥・蟲の聲につけても、自ら心をなぐさむるもの多く、松の柱、竹の編戸、小柴垣などのしつらひ、萬の調度さへもいたうことそぎて、庭なども只自らなる巖のたゝずまひ、軒近く滴る水を、古木のうつぼめく物にうけためたる、飯炊ぐにも手洗ふにも、只この水にて事足りぬ。

山水圖（柳澤淇園筆）

―「櫪園文集」―

住まであはれは
「山深くさと、そ心はかよふとも住まであはれは知らむものかは」（新古今集、西行法師）

水引の白絲はへて
「水引の白絲はへて織る機は旅の衣にたちや重ねむ」（後撰集、菅原道眞）

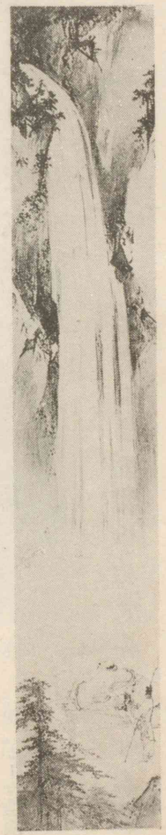
まれ〳〵訪ひくる人、はたあるじまうけなどいふこともせず、蕨・土筆・筍・野老などの、折に從ひ所につけたる物して、手づから造れる白酒すゝめなどす。同じき物語も、人ぎき憚るべき事しなければ、心に殘すくまもなくて、忘ひすゝみぬれば、やがてうちつれつゝ、只さながらなる打解け姿にて、そこはかとなく、あくがれありきなどするも、「住まであはれは。」とかいひけむやうに、又なく心ゆきて、命ものぶるやうになむ。

―「櫪園文集」―

一九　瀧

瀧はいと高き巖のかしらより、布引きはへたらむやうに遙かに落ちくだれるが、なからばかりにさし出でたる巖に當りて、こなたかなたに碎け散る水の末は、烟のやうにうち散りまがひたる、いとをかし。「水引の白絲はへて。」といひつべく、細やかに長う落ちくる

もなつかしう見るを、未たえ〳〵に苔滑かにて、巖のみしめりたるは、あはれ心ゆくばかりもとくちをしうおぼゆ。又崩れ落つる雪とか、山もとゞろにて巖もさかのぼるやうに見えたるは、心すごく近くもえよらず。瀧壺などいと廣く青やかなるは、何ともなく恐ろしくや。されど水烟の風に吹きやられて、遠き梢まで靡き行くに、日影かゞやきて、そのあたりに虹の立ちたるは、いとめづらかなり。庭のうちに巖をするゑてよきほどに流しおとしたるが、水の音にまぎれて、物語などのはし〳〵きこえぬもをかし。―「樞園文集」―



李白觀瀑圖（岳翁筆）

二〇　漁村

あまのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の風もたまらぬ松かげなどに、たゞかりそめにつくりたる藁屋どものさま、浪うちよせなば、やがて流れも失せぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なか〳〵にをかしきものから、さてすまひなば何心地かせましと、思ひやるだに心細し。

夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立ちて、げふはいとおそくもあるかなどいひつゝ、沖の方をまぼりをり。うまごどもにやあらむ、まさごの上をはしりありきつゝ、遊びゐたるに、入日さしたる島かげより、三つ二つ歸りくる舟の、楫引きをりてほこらしげなるを、老人まちえ顔に打ちほゝえみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。渚に寄せて飛びおるゝまゝに、綱繰りよせなど、とかくしつゝのゝしるに、男も女もあまた出できて、大きなる籠に魚ども取入れつゝ、荷ひもて行くさま、さはいへどにぎはゝ

しげなり。くゞつめく物もて來て、ちひさき魚三つ四つ請ひもて行くわらはなどもあり。すべて人多く立ちこみ騷ぎて、舟のあたりかしましく、さし寄りて覗くべうもあらず。いと長き網の渚にかけほしたるを繰りためて取入れなど、やう〳〵靜まりゆけば、此方かなた火ともしたるすきかげ、壁もあらはにていとあはれに見ゆ。

一夜やどりて見れば、浪風のひゞき枕をゆすりて、つゆまどろまれず。曉がた隣の家々目さましてなりはひのことどもなるべし、あやしう聞きしらぬことどもを、おのがじし聲高に言ひかはしたるげにあまのさへづりめづらしうもをかしうも。

—「櫪園文集」—

二　近水樓の記

橘千別が家を近水樓といふ。その名のゆゑよしをおもふに、庭ぬちに池あり。しめの外に川流れたり。かれこの池と川とによりてや名づけつらむ。

池は海原なせる廣きにもあらず、庭潦なせる淺きにもあらず、いとよきほどにつくりて、いとよきほどに水をたゝへたり。

川はさかまく浪のおどろおどろしきにもあらず、岩つたふ雫のたえ〳〵なるにもあらず、いとよきほどの川にて、いとよきほどの水流れたり。

池は浪のあやこまやかにして、松の蔭に龜あそび、川は瀨の音さやかにして、岩のひまに魚ひれふる。

あるじ高き屋にのぼり、池にのぞみ、川にむかひて、心を慰め、おもひをやり、歌よみ、ふみつくり、月花のみやびを過ぐさず。かれこの池と川とによりてや名づけつらむ、いとみやびたる家の名、いとみやびたる家あるじ。

—「櫪園文集」—

藤井高尚

松の屋と號す。備中國吉備津の宮の祠官にして、從五位下長門守に到る。本居宣長の門に入りて國典を研究し、殊に文章に妙を得たり。文詞の軌範たるべき書を著し、學徒に教授し、就いて學ぶもの頗る多し。天保十一年歿す、年七十七。

松屋文集二卷は、文化八年の刊行にして、中古文に擬したる雅文を集め、その續集たる松屋文後集三卷は、文政十一年の刊行にして、特に下卷は古文辭部とし、上古の文體に模したる文章を採錄せり。

一　花

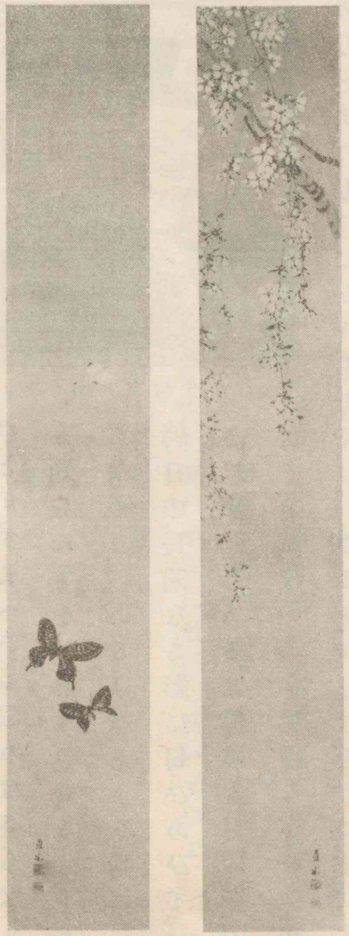
藤井高尚肖像

春くれば、咲かざりし木草の花もあまた咲きいづる中に、それかれとかずまへいふ限りはさらなり、名も知らぬもをかしう見ゆるは、をりからなめり。あるはいとよく晴れたる朝日の、長閑なる影に匂ひあひて、ひときは美しう、あるは霞める月の影の心にくきに、ほの〴〵見ゆるがいひ知らぬなど、あだし時にかゝらむやは。さるをかしきをりに、またたぐひなき櫻の咲きいでたるよ、いかでかはなのめならむとぞ。

—「松屋文後集、中卷」—

二　胡蝶

莊周が夢のうちに身をかへて胡蝶となりしといへるは、もとよりそら言ながら、をかしきふるごととて、昔より歌にも文にも作りあへり。さるは、胡蝶といふもの、見る目もいと美しく、名さへにくからぬ故ぞかし。蓑蟲などになりたる夢物語ならば、かゝらむやは。花園に初は三つ四つと數ふるばかり稀に見えしも、いづくよりか來つらむ、あまたになりて、空にとび、木がくれをゆく。あした



蝶　（平井直木筆）

しくものぞなき

「照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき」（新古今集、大江千里）

には露にぬれて小さき羽も重きにやあらむ、立ちかねて、なほ花びらにすがりて眠りゐたるに、風のさと吹きくれば、驚きておのれも亂れ飛び、ゆふべにはねどころを爭ふにやあらむ、こゝかしこの花にすだきて、たちゐひまなきがをどるやうに見ゆるなど、いとをかし。ましてやむごとなきわたりの前栽の花にすみて、玉簾近くとびありきたらむは、あひ〳〵て、ひたひつきも羽衣も、ひときはあてに美しうぞ見ゆらむかし。

―「松屋文集、上卷」―

三　山の春の月

「*しくものぞなき。」と、昔のなにがしがいたくめでしも、この頃の月ならむと、そゞろに心うかれて、暮るゝより端近くゐて、ながめつゝ待つに、霞深く立ちおほひて、いとゞ暗ういぶせきに、山ぎはのやうやうあかくなるは出づるなりけり。霞も少しは晴れて、照りもせ

心しれらむ人「あたら夜の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや」後撰集、源信明）

片岡の「片岡のこのむかつをに椎まかばまかば今年の夏の蔭になみむかし」（萬葉集、作者不詳）

ず曇りもはてぬ眺は、さやかなる秋よりもまさりて、心しれらむ人に見せばやと、この月ばかりにもいはまほしうなむ。」「松屋文後集、上卷」

四　新　樹

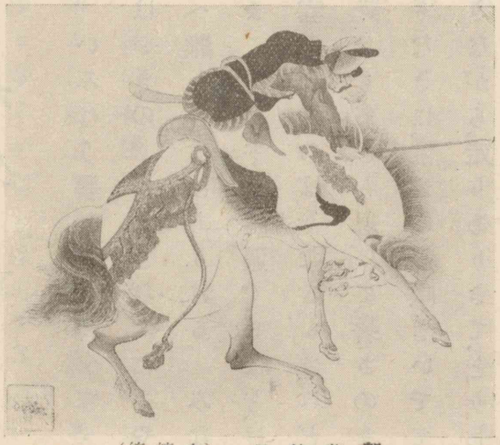
「片岡のこのむかつをに椎まかば。」といひしふるごとを思ふにも、げに夏は木かげこそいとなつかしくて、卯月來ぬれば、青やかに茂れるが、まづ目につきてなまめかしう見ゆかし。　まして、むら雨の名殘の夕露にぬれたるは、ひときは美しきに、暮れはててはをかしき程なるとうろの火に、淺緑の若葉の色のいと濃く見ゆるも、また言はむ方なし。

―「松屋文後集、中卷」―

五　賀茂祭

昔よりたゞに祭といへば、賀茂のうづきのと誰もこゝろうるは、

天の下に多かる神の祭の中に、すぐれたればなるべし。げに齋院などおはしまして、わたらせ給ひなどしたらむは、いかばかりかかうぐしくいつくしかりけむ。　さるいみじきことの世のさわぎに久しくすたれたりしこそ、いともいとも悲しく口惜しかりしか。　まのつぎ橋絶えたるをつぎ給ふ世となりて、此の祭もおこされてはあれど、大きなる神わざなれば、はじめはことそぎたる樣なりしを、をりぐに一つ二つとことそひて、やうぐ昔にかへりゆけば、大神の御心にも嬉しくおもほしめさむはさるものにて、見奉る人もをさまれる世



賀茂競馬　（良繊筆）

に生れて、かゝる時にあへるをなむよろこびぬる。」「松屋文後集、中卷」

六　夕立

いみじう暑き頃も、朝夕すゞみといふことのありて、しばしが程はいきのぶるわざなるに、あやしう、あしたより、またなく暑さの堪へ難き日なむありける。みな人けふは夕立すべしとぞいふなる。まことに、午の時過ぐるほど、けしきづきて、遠方の峰に墨の色なる雲ぞたちのぼりたる。されど、いと遙かなれば、このわたりまでは降りも來じと思ひて、暑さのまぎらはしに手習などしつゝ、さる心もなきに、俄かに風吹きいでて、反故どもちらせば、こはいかにと驚きながら、走りありきて、とりしたゝめなどする程に、はや降りきて、吹きいるゝ雨の脚よこさまに、簀子などはおどろおどろしうぬれわたりぬ。かみさへいみじう鳴りひらめけば、ものおぢするわらはべをんなどもは、いたうわなゝき惑ひて、とばりの中に隠れふして、耳ふたぎつゝ、いかさまにせむと思ひたるさま、いと心ぐるし。からうじて、かみなりやみぬれば、簀子の端にゐざり出でて見るに、やゝはれゆく雲の末に、かすかなる光のほのめきたるは、さるおそろしかりしなごりもなく、いと涼しきながめなりけり。

「「松屋文集、上卷」」

七　荻の風

秋の初風待ちとるたよりにとて、みぎりに荻を植ゑおきたるに、年々に廣ごりつゝ、軒をあらそひて生ひのぼれば、うたて處せうも茂りゆくかなと、はて〳〵はいぶせきまでに思はるゝに、風のやどりになりて打ちそよめけば、聞くたびに物おもひの催さるゝも、いとどわびし。さりとてこの音なからましかば、長き夜の寢覺まぎ

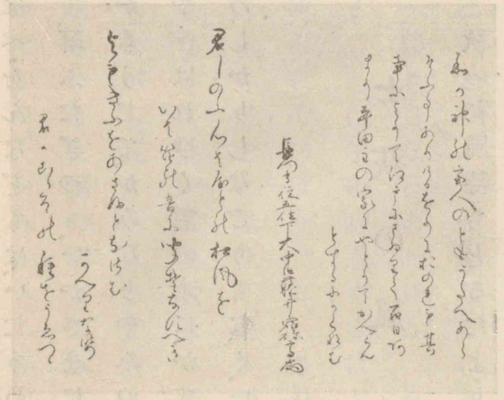
心づくし
「木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋は來にけり」（古今集、讀人知らず）

わか神の宮人のともうたへあらそふ事ありけるをりにおのれも其事によりて江戸にまゐりて百日あまり平田主の家にやとりてかへらんとするにかくなむ
長門守從五位下大中臣藤井宿禰高尙君しの心はやとの松風をいは笛の音に聞そたすへきよもきふをあさふとなさむかへりなは君かこころの種をうゑつゝ

るゝかたなく淋しからまし。げに昔人もいひしごと、とにかくに心づくしなる秋にぞありける。

―「松屋文集、上卷」―

八　秋の田



藤井高尙筆蹟

秋の山田は夜こそことにさびしきものの、さすがにをかしくはあれ。あやしの小屋に、賤の男が起きゐて、引板ひきならしつゝ、鹿猿を驚かし、谷水の流れにかけたる引板の、おのれと音するなど、とりあつめてあはれなること多かり。かく心を盡してもるとはすれど、曉近うなりては、うちまどろむにやあらむ、物の音な

ひもたえ〳〵なれば、小屋近く鹿のより來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顏なりや。

―「松屋文集、上卷」―

九　菊

山路の菊たづねみむとて、谷にそひてのぼる。さがしといふばかりの道にはあらねど、ならはぬ山踏みはくるしうて、あへぎつゝ行くに、やう〳〵水の音すみまさりて、流れのいさぎよう見ゆれば、こゝろとまりて、岩根におりて、手に掬びなどするに、あやしういとかうばしきは、もろこしにありしと音に聞く、何がしの谷のたぐひにやあらむと思ふに、いとゞ水上ゆかしうて、流れにつきてのぼりゆけば、思ひしもじるく、此方彼方の岸に、菊いと多く咲きみだれたり。花の色香はさるものにて、ところのさまも世の常ならず。仙人のかならずかよふべきところと見ゆれば、ゆのまと思ふがう

千とせや
「ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我はへにけむ」（古今集、素性法師）

ちにも、千とせや經ぬらむかし。

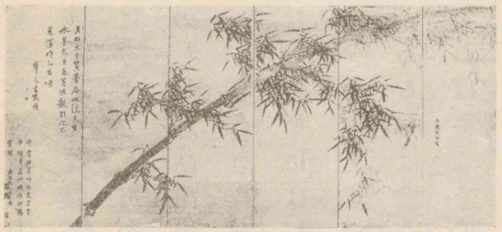
「松屋文集、上卷」

一〇　初冬の山家

神無月のついたちの日、昨日の秋の名殘を慕ひて、殘る紅葉をもたづねみがてら、ある人の山住を訪ふに、柴の戸閉ぢて、人げも見えず。さゝ垣のひまよりのぞけば、苔むせる庭に紅葉散りしきたり。このすまひこそ羨ましけれと、暫し立てるに、後より人のくる音す。顧みれば、あるじの落栗拾ひて歸れるなりけり。いたう喜びて、いざ此方へと誘ひ入りて、かくて住む程のものがたりす。珍らしく聞きゐたるに、冬立つ日なるもしるく、時雨の降る音の聞ゆれば、外の方を見いだすに、山風あら〳〵しく吹きて、四方の木の葉の散りみだるゝにぞありける。今日だにかゝり、まして冬深くなりて、雪霰がちならむ折ぞおもひやらるゝ。あるじ炭櫃に火おこして、かの栗を燒きて、箱のふたにおきてさしいだしたるも、さる方にをかしきまうけのさまなりかし。

「松屋文集、上卷」

一一　竹の屋の詞



竹（沈南蘋筆）

堀川のわたりなりし、かのあすか井の君のやどりにはあらで、この山かげの竹多かる所に、萱ふける庵あり。竹の屋とぞいふ。その竹にあえてや、住む人の心もなほく、しづけくなむ有りける。

庵のうちせばしとて、造りそへたる所なむ竹の林の中にて、殊にをかしかりける。谷より出づる鶯も、近きにたよりよければにや、やどりをしめて、あけくれ聲絶えず。夏きては、子規はた

夜な夜な耳なれて、まづ初聲はとほこりがほなり。あつき日かげをへだてて、葉わけの風世にしらず涼し。夕暮に蚊遣火のけぶるにぞ、すこしあつかはしくて、かの行くかたしらぬと言ひけむ、伏屋のした思ひ出でらるゝかし。秋は八重葎にもさはらぬ月かげのおもしろき夜、蟲の聲のしげうきこえたるなど、いとえんなるに、また竹の葉にはだれ霜ふりたる朝、雪のつもりて末のなびき伏したる夕など、えもいはずをかしきながめなりけり。

あるじは藤井重政とて、常に歌よみ、書よみ、みやびを好む人にしあれば、さこそ心にかなふすみかならめとぞ。

—「松屋文集、上巻」—

行くかたしらぬ　「我が心かねてや空にみちぬらむ行くかた知らぬ宿の蚊遣火」（狭衣）

一二　松

いま一しほのと昔人の言ひしは、げにさることにて、いつともわかぬ松の葉のみどりも、春のはじめ雪きゆるより、色そひて見ゆるなむ、またなくいみじき。夏は吹く風の涙の音にまがふも、ひやゝかなる心地するに、日をさへて下涼みいひしらず。秋は葉ごしの月かげことにさやかに見え、冬は雪のつもりたるさまいはむかたなく、なべての木とひとしなみにやは見ゆる。

かくをりふしにつけてをかしく見どころある此の木しも、千とせのものにて、人の齢ながかれとてのねぎごとにも、先づためしに言ひいで、これが根にある藥の老をたすくるなど、萬づたらひて、めでたく、いさゝかもなんずべきくさはひ交らざりけり。あなをかしの木や。

—「松屋文後集、中巻」—

いま一しほの　「常盤なる松のみどりも春くれば今一しほの色まさりけり」（古今集、源宗于）

一三　鶴

鶴は空高く飛ぶも、翅こそさだかに見えわかね、靜かなるさまいとしるし。まして間近くおりゐたるは、たとへば、よき人の冠うへ

のきぬきて、立ちたまへるに似て、いと〳〵やむごとなげに見ゆかし。羽衣の雪はづかしく、額の限り紅きを、千年經にけるなりといふは、仙人の數へ知りて、いひそめけることならむとぞ。

―「松屋文集、上卷」―

一四　相撲

このごろ、近きわたり、何がしの山の麓に、すまひびとあまた集りて、すまひとるなりと、わらはべのいふをほの聞けど、好まぬ事なれば、耳にもとまらざりしに、ある人の來て、「いざ、すまひ見にものしたまはむや。大かた、天の下のすまひびと、殘らず集りてなむものすなる。田舍にては珍らしくいみじき見ものなり。」とて、ふところより、其のすまひ人の名どもしるしたるもの取りいでて、「これは、かれは。」などいひて、ひき動かしつばかりにそゝのかせど、なほ行きみむことは急がれぬ心地して、おもひやすらひたれば、「こは、いとあまり にも侍るかな。遠き所よりだに、ふりはへ見に來なるものを。」と切にいふを、強ひて辭まむも、けにくきやうなればとおもひおこして、「さらば、しのびてものせむ。」とて、もろともに出でたつ。

そもく、すまひといふものは、垂仁天皇の御代に、野見宿禰と當麻蹶速とが力くらべせしをはじめにて、代々の帝もすてたまはず。昔は、もゝしきの大宮にて、年々このことありけりとぞ。今のすまひもその流れといふべく、とり所なくくちをしきはにはあらずと思ひつゝ、いたりて見れば、そこらひろくしめて、めぐりには唯かりそめに竹編める垣しわたして、そのあたり人しげくさまよふさまなど、はやく都にてみし、あやめの節の加茂のくらべ馬のをりのこと、おもひ出でらる。

山かたかけて、さじきなどしつらひたり。彼處こそ高くてよく

見えめとて、こゝらの人の立騷ぎたる中を、わけつゝいたりてみれば、もとよりなみゐたる人々あり。所さりきこえむといふをとゞめて、人の後よりのぞきみるに、わらふだのなりして、疊四ひらばかり竝べたらむ程の廣さに、眞砂を高くしきて、四方の隅に柱をたてたる所あり。そこを中にして、すまひ人ひんがし西とかきわきて、あまたむれゐたり。見る人もまたかた〳〵にわかれて、各心よせつゝゐるめり。

木うちならす音すれば、程なく東なるすまひ人、ある限り出でて、かの眞砂しける所に立ちなみて、あしぶみして入るは、すまひの作法なるべし。西なるも皆出でて、同じさまにして入れば、扇もたる人すなごの上をありきながら、かのすまひの祖なる野見宿禰のふるごとをながく〳〵といふには、あくびうちする人ぞ多かりける。

さて、すまひはじまりて、七手八手ばかりとりて後、またかの木をうちならして、作法うるはしう改りて、ものく〳〵しきすまひ人、例の所に出でてむかひ立ち、やがてゐて、かたみに氣色ばかりかしこまりたるさまして、手たゝきなどするは、ほてなりと、かたへの人のよく案内知りていふ。げにいづれとなく大きなるすまひ人の中に、ことにすぐれて、ゐたけの高う、いたくふとりたるは、かゝる人もありけるよと、目驚かる。扇持たる人たちよりて、東は何がし、西はくれがしと、高う名のれば、やをら歩みより、頭をまじへて待つ。かの扇をあぐるをり、やといふにあはせて、かたみに立ちて、手さしかはしつゝ、たけくいかきさまして、負けじとすまふ。かたきの腰にまとへるものをとらむとすれば、そのかひなをつととらへて、はなたず。とかくするさま、まねびやらむかたなし。」つぎ〳〵も、大かたかくなむ。勝ちたるはしたり顔にていれば、心よせの人々ゐみさかえつゝ、おどろおどろしき聲してほめあぐるを、まけつるは、いる

うしろ手いと人わろく、心よせの人々、はたうちひそみをり。その中に、如何なるすきものにかあらむ、麻衣をまくり手にして、まけつるすまひ人をとらへて、なぞ負けつるとて、腹立たしう、なきぬばかりにいふさまいと物ぐるほし。かゝること、すべておもしろき見物になむありける。されど、ものさわがしきにけあがりぬる心地すれば、見さしてかへりぬ。

―「松屋文集、下巻」―

清水濱臣

通稱は玄長、江戸の人にして、家は世々醫を業とせり。不忍池畔に住して、その家名を泊洒舍と號す。村田春海の門に入りて學び、博覽洽聞を以て稱せられ、特に文章に長じたり。性溫厚にして、子弟を敎授する事懇切なりしかば、その門に遊ぶもの頗る多く、權門貴族、多く延いて之を優待せり。文政七年歿す、年四十九。

泊洒文藻四卷は、文集にして合はせて百十餘篇を收錄す。今寫本を以て世に行はる。泊洒筆話一卷は、和歌典籍等に關する隨筆にして、文化五年の刊行なり。

一　花に寄する祝言

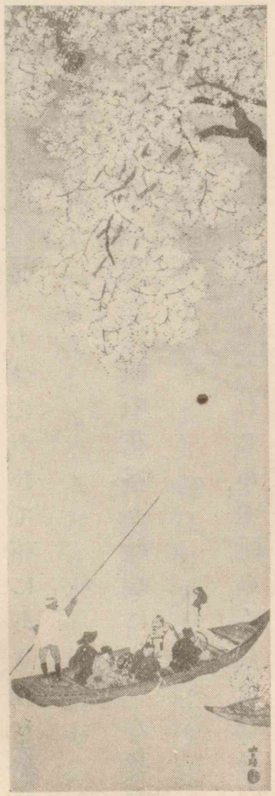
江戸の大城いくらもさらぬうしとらの方、大比叡うつされたる上野の岡の麓、志賀の湖なせるしのばずの池の汀に、さゞなみの屋の翁といふありけり。その身おほやけに仕ふるきはにもあらず、わたくしの主といふもなし。くすしのわざをなりはひとすれど、人をいかし、病をつくらふてだてを知らず。なまじひに文の林をわけながら、そのおくかを極めむともせず。すゞろに言葉の園に遊ぶとすれど、色なる一葉をも拾ひ得たることなし。たゞ春秋を花・紅葉の中にまじり、あかし暮して、齢早く四十に過ぎにたる天の下のいたづら

清水濱臣自像

人なりけり。そも〳〵天地の中にはらまれ、世の中にあれとあれ出づる人の身に、何事をか幸とし、何わざをか樂とはおもひ、いかなるふしにか喜ばしく、いかなるをりにか嬉しといはむ。あるはつかさ・位に望をかけ、あるはこがね・白がねを家に倉に積みかさねむことを願ひ、あるは桂の枝を折りて雲の上までも名を輝かさむことをほりし、あるは綾・錦を身にまとひ、絲竹の音に心をとらかすをたけきことゝするなど、心々のひくかたによりて、とり〳〵に捨てがたき習なるを、このいたづら人更にかゝるすぢを心ともせず、もはら野山の遊に身をゆだねて、樂しきことのかぎりと思へるは、いみじき世のすねものなりけり。

この春も二月のはじめより、むかつをの梢に目をつけ、匂ひそむるを待ちとりて、朝に行き夕に至り、花の蔭に立ちもとほりつゝ、なほあかぬあまり、飛ぶ鳥のあすかの山をわけ、行く水のすみ田川に

さかのぼりて、花より花に狂ひめぐりけり。さるにこのいたづら人自ら思ひけるやう、あはれさちある身や。あはれ樂しの身や。われらいかばかり野山の花にあくがれむとすとも、櫻花絶えて匂はぬ唐國の境に生れ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに花見ることを得む。今嬉しくも、日の本のやまとの國に生れたる、これ一つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれむとすとも、四方の海靜かならず、浪風しくめる世に生れ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに花見ることを得む。今嬉しくも、治れる大御代に生れあひたる、これ二つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれむとすとも、深き八重山の奥、遠き島隱れに生れ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに花見ることを得む。今嬉しくも、咲く花の匂ふが如き江戸の大城の下に生れあひたり。これ三つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれむとすとも、位高くつかへの道にいとなく、よろづ處せき身ならましかば、何にかく思ふがまゝに花見ありくことを得む。今うれしくも、天の下にほださるゝことなく、身を心にまかせたり。これ四つのさきはひなり。われらいかばかり野山の花にあくがれむとすとも、病つねに身をおかし手の奴、足の乘物、心にまかせずば、何にかく思ふがまゝに花見ありくことを得む。今嬉しくも、身すくやかにいたづくかたなし。これ五つのさきはひなり。あはれまことに樂しく、よろこばしく、嬉しく、さきはひある我



花の渡し（西村青歸筆）

が身ならずや。かく思ひ誇るあまりに、花に向ひてうたひ出でたる歡び歌、

わか櫻にほふ御國に生れ出でて花もてはやす身を
ぞよろこぶ
治れる御代の惠にあひにあひて花にあきぬる身を
ぞよろこぶ
鳥がなくあづまの比叡の花盛り軒端にめづる身を
ぞよろこぶ
春ごとに花の盛りをたれこめず眺めくらさむ身を
ぞよろこぶ
けふいくか花より花の旅寢して家路わするゝ身を
ぞよろこぶ

—「泊洒文藻、卷之二」—

二　水鷄

殿へまゐりたれば、庭の遣水清うはしらせて、石のたてかたもかどあるに、よしある梢ども色をふかめて、散りのこりたる卯の花垣もあはれおぼゆるを、かたへにはさゆりなでしこ、今をさかりと色を交へて、露涼しげなる、とり〴〵言はむ方なきに、夕立ひとしきりして、光ぬれたる月影、波に浮べるに、釣殿のもとにて水鷄のうちたたきたるが、耳にさしあてたるやうなるぞ、昔物語の心地して、いと艶におぼえけるかし。

—「泊洒文藻、卷之二」—

三　萩をめづる詞

木の花は春に匂を盡し、草の花は秋を時とすれば、誰も皆春は山邊をとめ、秋は野路にあくがるゝをこそ遊の道の常とはすれ。そ

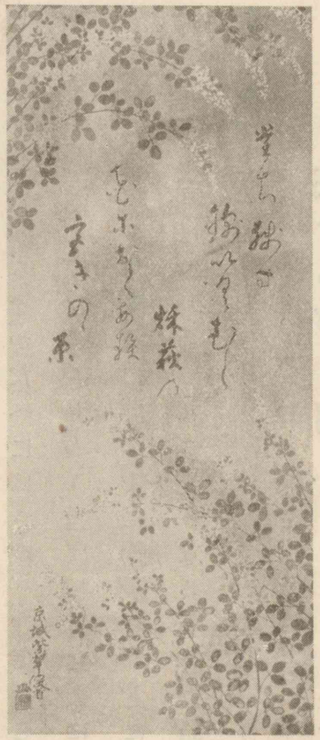
山上の國司　山上憶良。萬葉集中の歌人、筑前守たり、天平五年歿、年七十四。

たゝ殘す錦いくむら秋萩の花におくある宮きのゝ原

七くさ　「秋の野に咲きたる花をおよびをりかき數ふれば七くさの花」（萬葉集）

「萩が花尾花葛花撫子の花女郎花また藤袴朝顏の花」（萬葉集）

もそも花野の秋に咲亂るゝ千草は、とをはたみそよそと、その數多かめれど、これはしもと取出でてめで弄ぶべきは、かの山上の國司のよみおかれたる七くさになむ盡きぬべき。そが中にも、また勝れたるはいづれとか定めむ。女郎花はいとなまめかしく、懷かしげなれど、唐人もなにがしとかその名をよびて、おとしめたるもことわり、花の盛りなるほどこそあれ、はて〳〵はうたてあやしき香のそひて、花瓶に入りたる名殘などもあさましきまでに鼻さへ打覆はるゝや。撫子は唐にやまとに色を交へてうるはしくあてなれど、常夏にうつろはずして、秋にまで咲きかゝれるが飽きたる方もあるべし。朝顏はいとらうたし。朝ごとに色改むるなど、心地清げなれど、これはまた見るほどもなく萎れわたりて、露のひるまをだに待たぬが、事足らぬ心地す。葛は風のまに〳〵吹返す葉末のうら珍らしきこそあれど、はひ廣ごりもうるさく、藤袴は匂のいひしらぬはさるものから、見立てなき花のさまならずや。尾花ぞ古き歌にも「秋とはいはむ」と詠みたればあるが中にも優りたるやうなれど、廣き野末にめぢのかぎり高やかにさし靡きたるは、白妙の袖ともあやまたれて、心とまる心地すれど、二もと三もとが處せきつぼの内などに生ひたてらむは、何のをかしき節かあらむ。



萩　（乾山筆）

秋とはいはむ　「人皆は萩を秋といふよし我は尾花がうれを秋とはいはむ」（萬葉集、作者不詳）

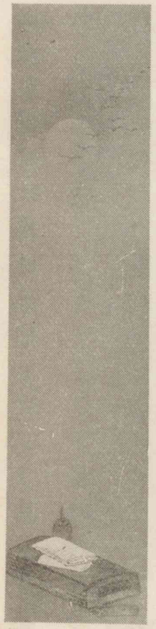
いでや、萩の花を見よ。秋の初風やう〳〵身にしみ渡るほどより、かつ〴〵咲きそめて、或はなだたる大野ら、或は程なき前栽、多くも少くも、やごとなき御垣の下にも限らず、葎はふ賤がはひりをも

きらはず、處えて匂ふさま懷かしくはためでたきにあらずや。さらば七くさの内にも優るべく、千里の中にも勝れたるは、この花をさじおきてまたいづれとかいはむ。

—「泊洒文藻、卷之二」—

四　砧を聞く

近しと聞けば遠し。遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらむ。砧の音の雁がねに通ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つ折のうきゆゑか。皆あらず。聞く人の心のわびしきなり。



砧の下月

—「泊洒文藻、卷之二」—

神代もきかず
「ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは」（古今集、在原業平）

水も無く
「水も無く見えこそわたれ大堰川岸の紅葉は雨と降れども」（後拾遺集、藤原定輔）

故郷の鱸の膾
呉人張翰の故事。

五　落葉

神代もきかずとながめけむ龍田の川の秋の末、水も無くとつゞけたりし大堰川の冬の初こそ、聞きわたるにも、いかばかりなる紅葉の淵ならましとゆかしけれ。吉野川の春のくれも花のしがらみかけて思はぬにはあらぬものから、かくばかり優なる紅葉の錦にはたち及ぶまじうなむ。唐の何がしの江にさらすとか聞けるも、知らぬ境思ひよそへられて、

縹色の帶かとまがふ河の面にゆはたと見えて散る
もみぢかな

—「泊洒文藻、卷之二」—

六　漁父の辭

秋吹く風に耳欹てて、故郷の鱸の膾思ひ出でけむ人こそ、げにさ

王公の位を釣りえし翁　太公望呂尙の故事。

る事とは覺ゆれ。岸の額に老の涙を疊みて、直なる針に王公の位を釣りえし翁は羨ましくもあらずや。我は唯世を捨舟に棹さして、山陰の靜けく、水草の清からむあたりに、息の緒の限り心をやりて、上なき樂しみとはなしぬべきぞかし。

—「泊泊文藻、卷之三」—

七　琴後集の序

世に歌よむ人多し。或は短歌にたくみに、或は長歌にかしこく、或は文書くわざにすぐる。世に古學する人多し。或は御代々々の書を明らめ、或は四つのおきて文に委しく、或はあがれる世のふるごとぶみに心を深め、或は後の世の物語書を枕ごととす。其の人々に問へば、彼に委しきはこれにおろかに、此に思ひ入りたるはかしこに心淺し。しかのみならず、やまとざうしの上には、口さきらきゝたるも、唐ぶみに向へば爪くはるゝ類多し。まことそれも

錦織の屋の翁　村田春海。

服部仲英　南郭の養子、詩人。

鵜殿士寧　幕臣にして、漢學者。

皆川伯恭　淇園、京都の儒者。

佐々木學儒　江戸の儒者、後姓を吉田と改め、篁墩と號す。

安達文仲　名は修、下野の人、服部南郭の門人。

ことわり、誰やし人かは皆がら兼ねそなへたるあらむ。

わが家の佛貴ぶにはなけれど、この道々に行通りて、萬づたどたどしからぬは、吾が師錦織の屋の翁のみなむおはしける。翁こゝの事はすべて縣居の主人に問ひきかれたるよし、誰も能く知れる事なればいはじ。唐學は、初服部仲英ぬしに名簿おくられしを、仲英ぬし身まかられては、鵜殿士寧ぬしに從ひ、中頃都に上りて、皆川伯恭ぬしに問ひきかれし事多く、また後には佐々木學儒・安達文仲などいへる世に勝れたる博士たちに、あしたゆふべ睦び伴はれしかば、唐歌にも其の名聞えて、なま〳〵の博士口あかすまじくなむおはしける。

翁世に求むる所なくして、やむごとなき御前わたりに召さるゝ事を好まれず。唯花にあくがれ、月にうかるゝ外には、朝夕文机のもと去らずおはして、筆執るわざにのみあかしくらされしが、とも

すれば物學する人の爲に妨げられ、かくすれば病の床におきふしして、思ふ事いはで已まれたる事少からず、書きさして事終へられざりしもの數あまたなりき。歌をのみたてゝ物せられしとにはあらねど、おのづからこの方には世に知られ、人に用ゐられつゝ、やうやう天の下高きも卑きも、長きも短きも、老いたるも若きも、知る知らぬ、歌よむ人とだにいへば、千蔭春海と口にいはざる者なきやうにはなりにけり。

其の歌の姿、芳宜園のをぢは勢雄々しく、詞はなやぎたるを好まれ、翁はさびたるさまのこまかにしめやかなる節を心とせられにけり。文詞は趣を唐土にかり、詞をこゝに移し、ふるごとを求めず、さとび言を省き、新しく一つのさまを思ひ構へられて、わきてめでたくなむ物せられける。世の人翁をたゞに歌よみと思はむも、翁を知らぬなるべく、また唯に唐學の博士なみにのみ思はむも翁を知らぬなるべし。

翁若くしてなりはひの道に疎く、遂に家をはふらかして百千の寶を失ひ、はては事たらぬがちに年月を送られしかど、老いて後、言の葉に富み、學に富まれたり。いでや百千の寶はたゞ暫し生けるが程の富なり。言の葉と學とは、とこしへに亡き跡までの富なり。翁寶に貧しくおはせしかど、言の葉と學とに富まれたり。誠に天の下の寶の玉とは翁をぞいふべけれ。誰かは羨まざらむ、誰かは慕はざらむ。

今この言の葉のふみ世に普く廣ごりて、あひだおかず學の書ども板に彫られゆかば、吾が翁を天の下の寶の玉なりといふ事の、僞ならぬ事知られつべし。そも此の集の名におふせられたる琴じりの詞は、神功紀に、琴がみ、琴じりといふ詞のあるより、思ひ寄られたるなりとぞ。

—「泊泊文藻、卷之一」—

神功紀に云々「則命ニ武内ノ宿禰ニ令ム撫レ琴ヲ。喚ニ中臣烏賊津使主ヲ爲ニ主ト一。因以ニ帝神者ヲ。千繪高繪ニ置キ琴ノ頭ニ後ニ請ヒテ曰ク云々」（日本書紀卷九）

八　縣居翁の墓參會に

おのれ人に異なる一つの癖ありて、常に夢みることをおもしろみ、夢みることを樂しむ。しかはあれど、よき夢みたりとて、人に誇り語らむとも思はず、惡しき夢みしとて、夢ときにあはせて物にかへうつさむともせず。おもしろむしるしにや、ぬる夜として夢みぬ夜なく、樂しむからにや、はかなきことともよく心の底に覺えて忘れず。いかなればおもしろく、いかなれば樂しきぞといふに、夢といふものは思ふ心より見るとはいへど、いとゆくりなきことをのみ見て、思はぬ野山にもさまよひ、知らぬ昔人ともむつ物語し、あるはをかしき事、あるはおそろしき事、あるは苦しき事、昔かと思へば今、今かと思へば昔、げにうつゝなきものになむある。さはいへ、夢といふもの絶えてなからましかば、夜はたゞ徒らにいねたるのみにして、死せるに等しかりなまし。よしやはかなき夢心地にもせよ、これを見て忘れず、これを見て樂しまば、いねしほども起きゐたらむ心地して、五十年の命も百年の齡に思ひ比べられぬべし。徒らに死せるが如きに勝らじやは。おのが夢好みは、この思ふ心ありてのことなりけり。

まことや、いにし世を忍び、過ぎゆける昔を思ひいづれば、すべて何かは夢ならぬ。悔しく過ぎにし昔語は、取返さむにもよしなく、語りいでむもやくなきことながら、おのれいと若くて二十に三つ四つたらぬほどより、錦織の屋のあやなる手振に思をかけ、芳宜園の色なる言の葉を心に染めて、晨夕に馴れむつび聞えて、古事學びのことら問ひものしたるに、二人の大人だち、常にともすれば縣居の翁の世にいまそかりし折のこと打語り聞かせられて、「よろづただ夢のやうに覺ゆるは。」など慕ひ聞えられしが、その二人のぬした

ちも今は世におはせずして、その語り聞かされし折のことらもまた五年・十年の昔語となりにたり。

おのれ才拙く、心たましひたゝはしからで、學の常に愚なれども、幸に二人の大人だちに馴れしたしみて、翁の昔語を聞けり。その翁の昔語を耳に留め、二人の大人だちの世にいまそかりし晨夕を目に忘れずしあれば、翁のとありしふし、二人の大人だちのかゝりしすさみを、事に觸れては思ひいでて、かつ慕ひかつ懷かしむ。これまた面白く樂しき夢物語ならずや。

あはれ今この御寺に、翁のおくつき詣するも、年毎の恆例のやうになりて、十年餘り四年にもなりぬ。星移り月變らば、今もまた後の世の夢物語となりなまし。今年も例の人々とともにこのおくつき詣すとて、豫めことがきをまうけて、「いにしことらは夢の如くなり。」といふことを、歌や言葉やと人もよみ、われも作らむとするに、始にいへるおのが夢好みの癖思ひよそへられて、はかなきそゞろごとしも言ひつゞけられたるなりけり。

山寺のこけのむしろに旅寢してふりし世しのぶ夢
がたりせむ

—「泊洒文藻、卷之三」—

九　筆の跡を見て亡き人を偲ぶ

この夏は例よりも照りはたゝきて、いと堪へ難ければ、何くれとなすべきわざもうちおきて、門守る犬のやうに喘ぎのみ暮しぬるを、いつしか秋風のそよと耳驚かすに、徒らにかくてのみやはとて、ひぢ近なる厨子どもより始めて、塗籠の書ら數のかぎりひき廣げて、日に曝し風入るゝに、塵箱の底にこめられて、紙魚といふ蟲のすみかとなりにし反故どものいと多かるを、かゝる序に一つ二つとうでつゝ開き見るに、早くより睦びかはしたる友垣の言の葉ども

秋風のそよと耳驚かす
「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」（古今集、藤原敏行）

の中を、およびを折りて、其の人彼の人と數ふれば、「半*ばは泉に歸す。」とうちうめかるゝ中には、此の頃まで花にとひ月に向ひし萩*の屋のあるじのなむ、わきて數多く見出でたる。昨日まではありのすさびに見棄てたりしを、今よりは千とせのかたみと思ふに、そゞろうちまもられて、流れ落つる涙の、水莖の跡にそゝぎそふる心地すれば、

殘れとて殘しも置かぬ筆の跡をかたみと知らで形見とぞ見る

いでや光ことなる玉の聲は、うづもれぬ名と共に後の世までも聞えて傳はらむものから。

—「泊洎文藻、卷之三」—

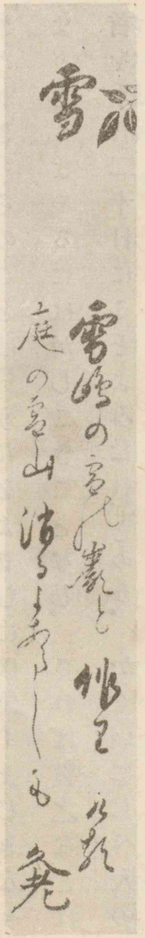
半ばは泉に歸す　「往事渺茫都似レ夢、舊遊零落半歸レ泉」（和漢朗詠集）

萩の屋のあるじ　植村正路、橘千蔭の門人、文化十五年歿、年四十六。

一〇　推敲

わが師は常によみ出でらるゝ歌いと遲吟にして、人の許にゆきて、そのむしろにのぞみてよまるゝ歌も、ある時は、「今日はよみ得ぬなり。」とて、ひねもす考へられたるまゝにて、空しく歸らるゝことたびたびなりき。文詞なども、筆とられてより、幾度か稿をかへて、なほ心におちゐぬ程は、そのまゝ厨子のうちに卷きいれおかれて、心のおもむけるをり、とり出ては、消し、補ひなどせられしことつねなり。されば、自ら許して清書せらるゝに及びては、誤れることは、をさをさなかりしなり。

荒*木田久老神主は、その心おきて、大いにことにして、速吟なるのみならず、序文など人にこはれてものせらるゝをりなども、「筆をとりて紙に向へば、詞腸忽ちに動く。」とて、案をも設けず、直ちに、筆を下



荒木田久老筆蹟

雪　雪島の雪の巖と作りける庭の雪山消るよあらしも　久老

荒木田久老　賀茂眞淵の門人、伊勢神宮の祠官。

されきとぞ。秀才なるはほめきこゆべきことなれど、さればこそ、その文詞、ともすれば、考へ足らぬことのうちまじることもありしなれ。又あまり筆のはしるに任せられて、深く考へらるゝまではなかりしこともありきとぞ。今いづれをかよしといはむ。

わが家の佛たふとぶにはあらねど、俊頼口傳抄にもいはれたる事ありき。そのことばに、「うたをよまむには、急ぐまじきなり。昔よりとくよめるには、かしこきことなし。されば貫之などは歌一首を十日二十日にこそよみたれ。」とあり。かくいにしへ人のいひおかれたるを思ふにも、口ときのみすぐれたることとはいひ難かるべし。しかのみならず、たとひ筆とりて、すなはち成れる文詞なりとも、その時こそいち早き筆づかひをほめて、いさゝかの疵あらむも、見ゆるしてはめづべけれ。後世につたはりたらむに、誰か見る人毎にむかひて、「この文は案をも設けず、ものしたるなり。されば、いさゝかの疵はありぬべきことか。」とは、ことわりいふ人のあらむ。そのをりはたとひ千度百度かき消しあらたむとも、疵なき玉とならむには、後世につたはりて、誰人もげにとめづべきものなるをや。

このまさり劣り、いかにかあるらむ。世の歌人のさだめいふ所きかまほし。

—「泊泊筆話」—

一一　健やかならぬはくちをし

わが師の常にいはれしは、「契沖阿闍梨・縣居翁などを、今の人の心よりは、四目兩口もありし人のやうに思へど、さらに今の人に異なるにはあらず。彼も人、我も人なり。自ら誇るにはあらねど、契沖阿闍梨・縣居翁、まのあたり本居氏などの如き、その才氣をくらぶれば、われもこの三人に劣れりとは思はず。たえて及ばぬことは、三

人の人たちは精神健やかにして、若きより老いの身にいたるまで、學の道に倦むことを知らず、きはめてつとめし人たちなり。われは幼きより、ほしいまゝに生ひ立ちて、物につとむといふ事をなさず。一夜もまどろまずをれば、つとめては倦みつかれて、物のやくにたゝず。一日つとめて、二日物のやくに立たぬ故に、何事も、心に

契沖筆蹟

日のもとの國をしつめて動なきふしのたかねの鳴澤のいし　契沖

思ふばかりの事を、十が一つをもなしをへずして、徒らに老いくづほるゝに至れるなり。これ身の怠りとはいひながら、まことはかよわく生れ、病に犯さるゝことつねにして、物をつとむるにたへぬが故なり。この三人の人たちは、常に文机のもとを離れぬ身なればこそ、人はさも思はね、學のかたよりはなれたる身ならば、馬おひ、車ひきて、五月・六月のてりはたゝき、霜月・師走のふりこほる頃に、はだしつるはぎにて、ひねもすに立ちはしるとも、身にいたづき知らぬばかりのすこやかさにこそあるべけれ。されば、學の道にも、何のわざにも、身のすこやかならぬは、よろづ口をしきものぞかし。」といはれき。今、濱臣が身の常にかよわく、病がちにて、學の道にことゆかぬにつけて、わが師のことば思ひ出でられてなむ。—「泊洒筆話」—

二　和歌と俳諧

今の世の俳諧といふものは、古の俳諧歌の名をかり、後の連歌といふものをにせて、俗事俗言をいひつゞけて、みやびごとに口なれぬ人も、たやすく心をやる「くさはひ」とせるものなり。古き俳諧は、その作者皆世の「すねもの」にて、詩歌の道にもたどくしからぬこころ、詞よりいひ出でしなれば、俗事俗言にも、自ら人の心を動かす

が多し。今の俳諧は、心詞いたく歌とは隔りて聞ゆ。

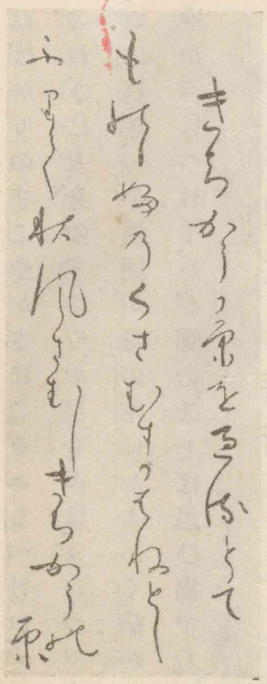
宇萬伎が歌に、

○ものゝふの草むす屍としふりて秋風さむし桔梗の
はら

とよめるは、かの桃青法師が句に、

夏草やつはものどもが夢のあと

きちかうの原を通るとてものゝふのくさむすかはねとしふりて秋風さむしきちかうの原



加藤宇萬伎筆蹟

といへるをうつし試みしなるべし。おのれいつの程にかありけむ、花の歌の中に、

みよしののよしのの山の花ざかりしばしものこそいはれざりけれ

とよめりき。これは、貞室老人の

これはこれはとばかり花のよしの山

といへるを思へるなり。古人の俳諧はよく歌に近きものにこそありけれ。今の俳諧もさるべきにや。おのが知らぬことなれば、くちごはくはいひはりがたし。

—「泊洒筆話」—

一三　埋火

いまし埋火にとはむ、いましよ、いづくの山に生ひたてる木ぞ。いかなる山賤にあひてか、かくはきり燒かれ、いかなるちぎりありてか、我が手にはならさるゝぞ。いまし山賤にもあはで、心のまゝなる奥山に生ひしげらば、天つ齢を保ちて、幾百年の後にもやすかるべきを、あはれ宿世のはかなさよ。

埋火答へけらく、まことさぞ侍る。また、さも侍らず。おのれ小*

小野山城。

野の山奥に生ひたちて、こゝらの春秋をへぬるものから、ならくぬぎの世に捨てられたる木にて、桃・李のめでたき實も結ばず、櫻・海棠のなつかしき花も咲かぬ身なるを、若しきりやかれてかゝる姿とならずは、いかで宮殿の裏に召されて、火とりの中にとりはやされ、臥籠の下にかしづかれて、侍*從・黑方などのえならぬ香にしむこと侍らむ。徒らに谷の底・山の陰に朽ちはて侍らむよりは、ほまれあるこの身には侍らずや。いかではかなきおのれとはのたまふぞ。

また詰り問はく、あはれ、あいなの榮えや、はかなのほまれや。いましその姿となりては、灰の中に埋れてあらむ程こそ、冬の一日ばかりはさてもありなめ。火箸もてかきあらはされなば、一時が間もながらふまじき命なるを、何の賴みどころありてか、榮えとはせむ。何のかゝりどころありてか、ほまれとはいはむ。はては、火消灰復死といふにいたらじやは。

侍從・黑方　香の名。

埋火、答ふべき詞なくて、うはじろみて灰の底におちいれり。

—「泊洒文藻、卷之三」—

一四　富士の嶺をよめる歌

富士の高嶺はわが國のしづめともいひ傳へて、こと山にすぐれたることは、言ひいでむも今更なることなりや。この山をよめる古歌、萬葉集よりはじめて、世々の勅撰・私集に入りたる名歌ども、あげて數へ盡し難し。

古はおきていはじ。近く、水無瀨中納言氏成卿の富士百首といふものあり。世に知る人なし。近きころもとめえたるに、

西の海やもろこしさして行く船のうへにもふじは
いくか見るらむ

忘れては空にも雪のつもるかと見れば雲間にはる

る富士の嶺

富　岳（谷文晁筆）

これらにならへる契沖阿闍梨の百首、長流隱士の三十首、いづれも珍らしく巧みによみかなへられたり。縣居翁の長歌ことにたへにして、人麿・赤人のにも、をさ〳〵劣れりとは見えずぞある。あがたゐの長歌の反歌に、

駿河なる富士の高嶺は雷の音
する雲の上にこそ見れ

ふじの嶺の麓を出でてゆく雲
は足柄山のみねにかゝれり

また、紀行の中に、

枝直　姓は加藤。
芳宜園　加藤千蔭。

いつの世のちりひぢよりかなり出でてふじははち
すの花と見ゆらむ

三首ともに秀逸ときこゆ。

また荷田東萬侶大人の歌に、

きゝしよりも思ひしよりも見しよりも登りてたか
き山はふじのね

枝直*が歌に、

天のはら照る日の近き富士の嶺にいまも神代の雪
はのこれり

芳宜園*の歌に、

はこねぢや神のみさかをこえ來てもなほふじのね
はくもゐなりけり

など、よきうたと人もいひあへり。

わが師の歌に、

心あてに見し白雲はふもとにておもはぬ空にはるるふじのね

この歌さまでの秀逸とも思はざりしに、いにし文化四年、おのれ伊豆のいでゆあみがてら、熊坂の里なる竹村茂雄がもとに志して旅だてる頃、熱海のいでゆを出でて、弦巻山の項にかゝりしに、浮雲西の空にたちかさなりたりしかば、ともなへる人に對ひて、「ふじは何處の雲のあなたにかあたりて見ゆる。」と問ひしに、遙かに指ざして、「彼處の雲の中にこそ。」といふ程、いつしか浮雲はれのきけるに、その指ざしをしへたる雲よりは、はるかに高く空に聳えて、ふり仰ぎ見るばかりなりしかば、さてその時ぞ、師の歌をおもひ出でてめできこえたりき。

—「泊泊筆話」—

村田春海

通稱を平四郎といひ、錦織齋、又は琴後翁と號す。春道の第二子にして、兄春鄕と同じく賀茂眞淵に就きて古學を修め、和歌、文章に長ず。春海又心を漢學に潛め、詩文を作り、當時博識の第一人者たり。その國文を作るや、法を漢文に取りて、別に一派を開き、本居宣長をして、江都に文人春海あり、余が企て及ぶところにあらずと、推賞措く能はざらしむるに到れり。門弟に俊才多し。文化八年歿す、年六十六。

琴後集十五卷は、春海の歌文集にして、卷一より卷九までは和歌を收め、卷十以下は文章の集なり。文章は、記・序・跋・書牘・雜文・墓碑祭文等に分類採錄したり。葛因是はその序文に於て、唐宋八家の風ありと言へり。文化七年の春海の自序あり、刊行世に行はる。

今年　文化七年。
絲なきを　「性不レ解レ音、而畜二素琴一張、絃徽不レ具、毎二明酒之會一、則撫而和レ之、曰、但識二琴中趣一、何勞二絃上聲一。」（晉書）

一　自序

むかし、父の世におはせし時は、遊びの道に深う心よせたまへりしまゝに、吹きもの彈きもの、なにくれの器ども家に數多傳へたるを、としごろ度々の火にあひて、今は多く失せもてゆきて、唯あづまごと一つなむ、これをのみ昔しのぶるくさはひには思ひたる。今年草の庵を改めつくりて、小さき伏屋を、己が常に住みならさむ所と定むるにつけて、思ひけるは、「かのあづまこそ己が家の寶なれ。いかでこれに所えさせて、そのかたはらにこそ起きふしすべけれ。われ琴ひくことはならはねど、絲なきをまさぐりて、思をやりしためしもあれば。」とて、これを

村田春海肖像

わがかたらひ人にて、さて、ことがみに硯一つ、ことじりに厨子一よろひをするゑて、年頃の言の葉どもをいれたり。

この頃、おのが心しりの人々とひきていひけらく、「年頃ものしたまへる言の葉どもは、いかにしたまふぞ。かきあつめたまはむには、われら筆たすけまゐらせむ。」といふ。「そは嬉しきことなり。さるは、拙き言の葉を人なみに世に殘し侍らむことは、はづかしきわざには侍れど、あまたとし思を寄せ心をこめしものを、いたづらになしはて侍らむはほいなし。ともかくも然るべからむやうに、とりなし給はむこそうれしけれ。」とこたへければ、人々彼の厨子より取出でて、かきあつめもてゆく。さて、「名をばいかに。」といふ。すなはち、「琴後とこそいふべけれ。」とて、その卷のはしつ方にぞ書きつけさせたる。

文化の七とせかみな月ついたちの日

琴じりの翁

二　山里に花を見る

一夜の旅寝は猶あかぬものから、散*り散らずとか待つらむ人もあめれば、けふは立歸らむとするを、花のたよりならではまたかゝる人目をも見じなど、あるじは止めまほしげなれど、鶯*に身をあひかへばとて、わかれにけり。

紫だちたる空のけはひ打曇りて、昨日は隈なく見渡されし梢どもも、霞の迷ひおぼつかなく、なか〳〵にふりすてがたきあしたなり。やゝおり來るまゝに、山ぎはあかりゆきて、やう〳〵さしのぼる日影に見やれば、小柴垣・萱が軒端はそこといちじるしく、ましてたちならぶ梢の雲はいよゝ手に取るばかりなれば、たゞかへり見がちなるに、風少しうちふきて、そこはかとなく散りくなるが、見るがうちに道もはだれになりもてゆけば、あな心*づくしの山櫻よとて、人々おりゐぬ。

谷水のながれかすかに音づれ、松の聲は遙かに響きて、散りのこる尾上の花は、猶わかれ惜しみがほに匂ひ、霞をもるゝ鳥のさへづりは、更に我をとゞむる心地のみして、うら〳〵と永き春の日も、今日はた晝間すぐるをだに知らざりけり。かくても斧*の柄はくたしつべくなむあるや。

—「琴後集、卷之十」—

散り散らず
「散り散らず開かまほしきを故郷の花見てかへる人も逢はなむ」（拾遺集、伊勢）

鶯に身を
「鶯に身をあひかへば散るまでも我がものにして花は見てまし」（後撰集、伊勢）

心づくしの山櫻
「ふめば惜しふまでは行かむ方もなし心づくしの山櫻かな」（千載集、赤染衛門）

斧の柄は
「斧の柄は木のもとにてやくちなし春を限らぬ櫻なりせば」（金葉集、大中臣公長）

山村の春
（德田隣齋筆）

三　花を惜しむ記

つれ〴〵と降りくらしたる長雨も、やう〳〵晴間おぼゆるに、かかる夕べをたゞにやは過すべき。春の行くへをもしのばむ。花の名殘をも見ばや。いざ。」とて、葎生の門おどろかすなるは、わが相思ふ人々なりけり。

「さるはいづこの心ゆく方ならむ。」といふに、「かしこの御館、こゝの御園生、この頃のけはひいかに見處あらむ。」といふもあり。また、「なにの山里、それの川づら、なほ散りのこる蔭をや尋ねまし。」などもいふを、「いでかのやむごとなききはの、塵もすゑじとおきてたらむは、春風の心もたどらで、あながちに朝夕かき拂ひなどすめるが、ところにつけてはめやすきわざとも見ゆべけれど、かへりては情おくるゝかたやいかでなからむ。またかの世離れたるあたりは、暮れ

羽生田名は貴良。

ゆく春のあはれもさこそ多かめれど、霞へだつる道のそらもいと遙かなるを、暮れかけてはなどか思ひ立たむ。さらば我も人もあひむつばへる羽生田のぬしの住居こそゆかしけれ。いざ給へ。」とて打連ねて行くに、ところせき巷の塵はたゞ中垣の一重をへだてなれど、やゝ奥まりてのどかなる方をしめつれば、木立ものふりて、霞のたゝずまひたゞならず。ましてあるじは古のみやび慕ふ人にて、なべて世の島ごのみてふ人の心ならひはまなばで、たゞおのづからなる山里の有樣をうつしたれば、はひりの方をばさながら畑につくりなして、なづなの花などの露に打亂れたる、いとつきづきし。垣根をめぐりては、田どころ廣くうちかへして、堰きいれたる水いと清らなるに、蛙の時知り顔に聲たてたるもをかしく、くろづたひの道かたゞ〴〵に分れたるには、花の木どもわざとならず植ゑわたせり。さるは夕日にもてはやされたる色香の、雨の名殘お

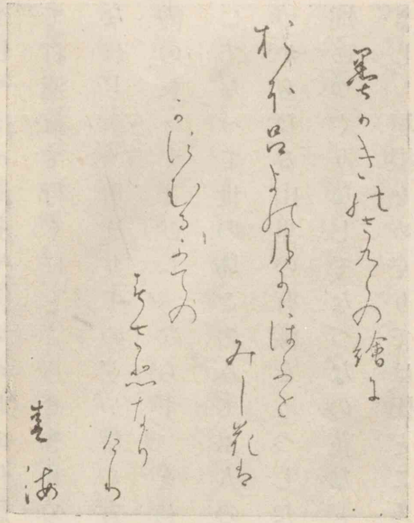
今日こずば　「今日こずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」（古今集、在原業平）

年にまれなる　「あだなりと名にこそ立てれ櫻花年にまれなる人も待ちけり」（古今集、讀人知らず）

墨かきのさくらの繪に　おぼろよの月にほふと見し花はかすむるふてのすさひなりけり　春海

ぼえて心ありげに散りのこれる。今日こずば。」とぞ見えたる。

あるじは待ちよろこべるけはひしるくて、「年にまれなる。」など口ずさみつゝ、風を待つ間の木のもとにおりゐて、うちかたらへば、おのづから浮世にとほき心地せらるゝを、たれかは市のかたへとはおもはむ。かくて家路をさへわすれぬべし。日入りはつれば、ねぐらにかへる鳥の音もわかれ惜しみがほに聞え、入相の聲かすかにつたふるも、春を閉ぢむる心地して、ゆふやみの空もなほふりすてがたしや。



村田春海筆蹟

かくながら花の木蔭に月待ちていざもろともに散るまでは見む

―「琴後集、卷之十」―

四　初雁

秋のけはひのうつろひ行くまゝに、野づらの住ひぞいはむ方なくをかしき。そともの小田の穂波は、かつ〳〵色づきそめて、籬の本の小萩は、折えがほにほころび渡れる、露の匂、風の音なひ、いづれあはれをそへざるなむなかりける。さるは夕月の面白きを、たゞにやはすぐさむとて、蓬生の露うち拂ふなるは、我がたまあへる人人なりけり。

伊豫簾高うまけば、村雨のなごりの月は絶えまがちなるに、そこはかとなき外山のたゝずまひも、月影にもてはやされて、やう〳〵あらはれ行きぬ。「山を望めばかすかなる月。」と、口ずさみ出づれば、折しも峰飛びこゆる一つらの聲さだかなるは、この麓田に落つる

山を望めば　「望レ山幽月猶藏レ影。聽レ砌飛泉轉倍レ聲。」（和漢朗詠集、菅原文時）

萩の上露　一鳴き渡る雁の涙やおちつらむ物思ふやどの萩の上の露（古今集、讀人知らず）

霞みていにし　「春霞かすみていにし雁がねは今ぞなくなる秋霧の上に」（古今集、讀人知らず）

世をうらみては　「初雁の鳴きこそ渡れ世の中の人の心の秋しうければ」（古今集、紀貫之）

なかぞらに云云　「初雁のはつかに聲をきゝしより中空にのみ物を思ふかな」（古今集、凡河内躬恒）

玉梓のたより　「秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる誰が玉づさをかけてきつらむ」（古今集、紀友則）

なるべし。げに「萩の上露もたゞならず。」など言ひあへるほどに、一人がいひけるは「霞みていにし雲路のなごりなくおぼえしを、秋霧の上に聲聞きそむるが、世にめづらかなることは更にもいはじ。すべて四つの時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのべ、すゞろなる心をうごかしつべきもの、いと多かる中に、世をうらみては、人の心の秋を悲しみ、うきを歎きては、なかぞらに物を思ひ、遠つ人をしたふとては、玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたぐへては、この世を假とたどるも、折にふれ事につけつゝ、あはれさ似るものなく、こそおぼゆれ。いでや今宵のなぐさめに、このくさ〴〵の心によそへて、おの〳〵事のべたまはむなり。」とあれば、澄みのぼる月影に向ひて、うそぶきいでたるは、心々の引く方なるべし。

世をあきと鳴きてすぐなる初雁をわが身のよそに聞きやはつべき

この世を假と　「秋霧のはれぬ雲井にいとどしくこの世をかりと言ひしらすらむ」（源氏物語）

こてふにも似ぬ云々　「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たりと待たずしもあら」（古今集、讀人知らず）

となむあるは、世をあぢきなく思ふ方あるにや。

むねの雲いつかは晴れむ初かりの聲もらすべきおもひならねば

いかなる人の上ならむ。

旅衣いくたび秋をかさねましまた初雁のこゑをききつゝ

こは故郷をわすれぬ人なれば、

雁が音のおくれさきだつ一つらをさだめなき世のたぐひとも見む

法師めきたる口つきやと、人々いひあへり。

―「琴後集、卷之十」―

五　芳宜園にて曇る夜の月を見る記

芳宜園の月のまどゐは年ごとの契なれば、こてふにも似ぬ夜の

夜の錦
「富貴不レ歸ニ故郷一、如ニ衣レ錦夜行ニ。」（漢書）

さまなれど、今宵も例の人々まうで來にけり。　さるは降りくらしたる雨のなごり、晴れゆかむ空も覺えず、ましてさやけき光待ちいでむは、いとゞ心もとなきを、「更け行かば、かくのみにはあらじを、今宵は寢であかしてまし。」などいひつゝ、伊豫簾むなしうかゝげて、空のみうちまもらるゝも、いとわりなしや。　今宵は名におふ園生の花も、いたづらに夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみ、やう〳〵聲そはりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれはそへつべし。

晴れまなき月をいかにといひ〳〵て空ながめにや
今宵あかさむ
かきくらす雲間の影はうとくとも月まつ蟲よせめ
てかたらへ

—「琴後集、卷之十」—

六　秋の山ぶみ

夜の錦
「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」（古今集、紀貫之）

法輪
嵯峨、渡月橋の南に在り。

都の旅居の久しう程ふるまゝに、おのづから住みなるゝ心地のせられて、今はむつまじう語らふ人々も多かるが中に、年ごろ心あひたる法師の法輪にあるが許より、「秋もはや殘り少うなりにて侍り。　山かたづけるあたりは、露霜の色も隈なう侍るを、あな心遲きぬしかな。」とそゝのかされて、時雨の雲と共にさそはれ行けば、あるじは待ちに待ちたるけはひしるくて、御堂の東の廂搔拂ひて、「此處にしばしやすらひ給へ。　先づ山ぶみのまうけせむ。」とて、破子なにくれの物などとう出て、のゝしりあへり。「いかでさはあはたゞしうは物し給ふぞ。　世にかゝづらふ事もなき身にし侍れば、一日・二日は猶こゝに在りて、高嶺の秋のにほひも心靜かにこそ尋ね侍らめ。」と言へば、「うたて、さはな宣ひそ。　山の名の嵐はたゞ時の間もうしろめたきを、あへなく夜の錦になし果て侍らば、いかに口惜しからまし。　いざたまへ。」とて伴ひ出づ。

新發意の年まだ二十には足らぬばかりなる一人、はしたなる程の童に、かの調じたる物など擔はせたり。「今日は常の道にもよらじ。唯梢の色をのみしるべとせむ。」とて、木こり・總角がふみわけたる跡を尋ねて、下照る陰を慕ひ行けば、所せき木の根・岩かどなどのいと歩み苦しきを、辛うじて少し平かなるかたそばに出でぬ。ここは木立もまばらにて、望みも隈なければ、苔のむしろにおりゐて見るに、げにも高嶺の方は唯いくむらともなく錦を張りたらむやうにして、日影に輝きあひたる目もあやなり。

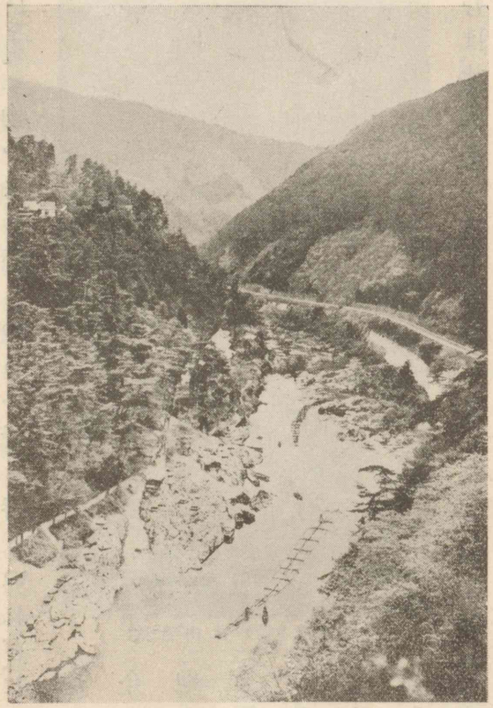
麓を見れば、大堰の河遠く流れて、縹の布ひきはへたらむやうなるに、散りうかべる木の葉は、紅のゆはた晒せるが如し。「かの見ゆる向ひの山の殊に色こきは。」といへば、法師の言ひけらく、「これなむ小倉の峰なる。古くは中務のみこのかくれがしめ給へることも聞え、またかの定家のまうち君の『きのふはうすき。』と詠み給ひけむ

中務のみこ　醍醐天皇の皇子、兼明親王、前中書王と稱す。

きのふはうすき　「小倉山しぐるゝ頃の朝なな朝な昨日はうすき四方のもみぢ葉」（拾遺愚草）。

秋のみゆき　延喜七年九月の行幸。

も彼處にて侍れど、今はいづれもその跡とてはさだかにはえ知られ侍らず。又二尊院とてたふとき御寺の侍るは、法然大德の跡とどめ給ひけるより、今にその名殘忘れず。」などいふ。「さるはあはれなる御物語にも侍るなり。ふるき世を語るにつけても、このながれの遠き昔を汲み侍れば、かの延喜の帝の秋のみゆきの事こそ、折柄殊に慕はしうは覺え侍れ。そのかみ名高き歌人皆もろと



嵐山峡

もに參りて、みことのりのまに〳〵歌ひ出でたる言の葉ども、秋の錦にも劣るまじう侍りつるは、たとしへなうをかしうこそは侍りけめ。物かはり時うつろひ行き侍りぬれど、たゞこの山河の昔にかはる世もなければ、今も目の前に見る心地のし侍る。」などいふを、傍なる童の聞きて、「この汀の松のいとゞしく深く見ゆるは、古きみゆきの事問ひけむは、此の木にはあらずや。」などいへば、

みゆきせし昔の秋をいかにぞとまたも入江の松に問はばや

古きみゆき　「大堰川かはべの松に言問はむかゝるみゆきやありし昔を」（拾遺集、紀貫之）

秋景山水（橋本雅邦筆）

と歌ふを、法師の聞きて、「松にのみやは問はむ。嶺の紅葉も心ありげに見ゆるを。」とて、

小倉山いまもみゆきをまちがほに峰の紅葉ぞにほひことなる

と言ひつゝ、かはらけとうでて酒たうべなどす。かの新發意も人なみに物言はむとにやあらむ、から歌一つ口ずさみ出でたれど、まだかたなりなるが、文字の聲うちあはねばこゝには書かず。

かくて日影やう〳〵傾き行きて、夕を告ぐる鐘の音遙かに聞えくれば、猶わけ見まほしき方も多かれど、うちつれて御堂に歸りぬ。たゞ今日の山ぶみの猶飽かぬ事など言へば、あるじの「我もさこそは覺ゆれ。明日は大堰より船さしのぼせむ。」とあれば、「さらば、戸無瀬の紅葉をも見ばや。」などいひて、その夜は寢ぬ。

—「琴後集、卷之十」—

七　山水のかた書ける繪を見て

うつせみの世に人のことわざ多かめれど、靜けき窓の裏、幽かなる燈火の下に獨りゐて、よくつれ〴〵慰むべきものは、畫と書との二つになむありける。下れる世に生れ出でて、上つ世の人を心の友となすべきは書なり。足は都のうちに止りて、ひとの國の遙かなる境をも、たゞに見るべきものは、うつし繪のたくみになむありける。かゝれば、古の書どもくりかへし見る暇には、名だたる山川のけはひをうつしゑにしのび出でて、こを常に心やりぐさとぞなしける。

かくおのが心を思ひはかりて、ある人の見よとておこせしを見るに、山を疊めること十まり五つ、たゞ墨がきにかきなしたるが、濃きは近く、薄きは遠し。そのまぢかく見渡さるゝは、大木しげく生

世の經がたきためし

「太行之路能ハク摧レ車ヲ、若シ比ニスレバ人心ニ是坦途カ。」（白樂天）

ひたち、巖こゝら聳えて、道いとさかしともさかしく、かしこかる世の經がたきためしにいひけむ、からうたのこゝろこそおぼゆれ。又遠く見やらるゝは、あるかなきかに雲霧たち迷ひて、むれゆく鳥の翅も、末たゞきえ〴〵なるに、夕日ほのかにほへり。古の書に眉びきの如しといひけむは、唯かくぞと、まづ想ひ出でぬ。水のながれ一すぢ、その源をとむるに、幾千里の遠ともわかたず、又その落ちゆく末を望めば、何處をはかとも知り難し。その八十瀨の隈には眞砂いと清らに、さゝら波よる渚あり。又岩うつ波高くたちて、音きくばかりなるに、舟いたくさしわづらへるあり。又岸のまにまに入りまがりて、水淀みて深きは、そこひも知らぬ淵なるべし。さて水を隔てて、麓の方に、大きなる屋ども甍をつらね、こと〴〵しき門おしひらきて、前には石を橋とせり。又水の此方には、あやしき萱屋立並びて、垣根ゆひわたせり。又こゝかしこに人あり。あ

るは馬に騎れるも、あるはかちより行くも、あるは薪負へるも、あるは釣の竿もたるも、立ちたるもゐたるも、老いたるも若きも、そのさまいひも盡し難し。まして水草何くれのものは、數へもあへむやは。かくとほじろき山川の姿を、たゞ一ひらの紙の中に、こまやかに心しらひしたるは、世になき筆の跡とぞいふべき。たゞかくめづらかなるを、いづくの國、いづくの處を、いつの世いかなる人のうつし置きけるなりとも、知られぬこそをしけれ。これに對へば、あからめもせずうちまもられて、あくよなけれど、さはいへ、久しくとどむべきならねばとて、そのおほよそをしるしおきて、かへしやりつ。

安田躬弦　江戸の人、文化十三年歿。

―「琴後集、卷之十」―

八　安田躬弦の家の文臺の記

よろづの調度、古の蹤あるものは、よそほひありてうるはしけれど、氣近くもてなし難し。今の世に造り出づるものは、ことそぎて見所なけれど、とりつかふに心やすし。この文臺は、近き世に桃青法師が始めてつくり出でたる型なりとなむいふなる。法師は塵の世を遁れ出でて、假の宿りに心とゞめざりし人なりとかいふめれば、古のよそほしき姿は學ばで、今の世の心やすきに從へるにこそ。又こは神路の山の杉の古枝を、木造りなせるなりとなむ。そはゆくりなくなしゝわざなめれど、これを思ふに、とりよそひうるはしからむは、大かたに人の世の手ぶりにて、事そぎてかざりなきは、なか〳〵に神代のすなほなる心しらひあれば、この杉もてつくれるを、似げなしともいひ難し。

とまれかくまれ、物は事たらば、さてもありぬべきを、あまりにえり整へむとせば、失ふふしも出でくべし。わが友躬弦ぬしはふるきみやびごと好む人なるが、なほこの古に蹤なきさまなる物をも、

桃青法師　俳聖松尾芭蕉。

あるにまかせて捨てざるは、心ありとやいはむ。椎の葉も、祕色の坏も、ものを盛るには心ひとしく、網代の屏風も、錦の帳も、身をへだつるに異なるけぢめなければ、すべて物は一方をとりて、かたへをいひけつべきわざにはあらぬにや。

―「琴後集、巻之十」―

古の人　清少納言。枕草子「すさまじきもの」の條。

九　隨時樓の記

うつせみのよの人のことわざ、よろづにさまざまなれど、時にそむき折にあはで、つきづきしからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば、夏の日は埋火のあたゝかなるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。古の人も、春のあじろ、八月のしらがさねをこそ、すさまじきことの例には引きいでたりけれ。かゝれば、はかなきすさみも折にあひたるはをかしく、見所なき草木も時を得たるはめづらかになむおぼゆる。

しかはあれど、人ぐさしげき巷の、所せく門たち竝びたらむあたりには、時をすぐし、折を失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山遙かにて、四つの時のゆきめぐるに從ひて、心をやるべき住居はいとも得がたしや。

こゝに前田のぬしの高殿こそ、あやしく所得てはおぼゆれ。しりへは市路につゞくものから、前は世ばなれたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりを居ながら袂にしめ、夏は水際清き池の蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月にうそぶき、冬は雪にうたふも、すべて山水のあはれをそへざるをりなむあらざりける。ましてあるじの言の葉もて友にまじらふこと廣ければ、時にふれ折をすぐさず訪ひくる人々、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへにあく世もしらぬ高殿なればとて、聞中大德のことさらに、時に隨ふてふ事をもて名づけられたるは、ふかき心しらひにこそありけら

し。

一〇　知足庵の記

あはれ、世のならはしこそはかなきものはあなれ。高き賤しき品いとことなりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、たゞたらはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢のあらしをうらみ、月をめづるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。「林にやどる鷦鷯は、わづかなる小枝のかげをのみたのみ、ながれに水もとむる鼠は、たゞ腹にみたすに過ぎず。」とこそ古人もいひつれ。かゝることわりをだにわかたば、限りあるこの世に限りなき事を思ふべきかは。

こゝに中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松の樞に心の月をすましめ、花をつむゆふべ、閼伽をくむあかつき、御佛につかふるいとまある時は、氷をくだき雪を煮て、栂尾の昔をしのぶめる業にしも心をなぐさめける。これやこの世に求むべきすぢを忘れ、また人を羨むべきふしをも思はで、おのが心から事足るわざにしもあれば、かの古人のいひけむことわりにこそかなはめ。いでや、うつせみの世の限りなきもとめあるきはとは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべなるかな、この住家をしも足ることを知るとは名づけしこと。

—「琴後集、卷之十」—

林にやどる
「鷦鷯巢二深林一、不レ過二一枝一、偃鼠飲レ河不レ過二滿腹一。」（莊子）

栂尾の昔
建久二年、僧榮西、宋より歸朝せし時、茶の實を持參し、これを栂尾の明惠上人に贈る。上人悅びてその種を深瀨の園に植う。我が國の茶の始なり。

一一　泊酒舍の記

上野の岡の麓に池あり。この池の西なる方を萱が町とぞいひける。こゝに蘆原刈りひらきて、つい建てたる伏屋あり。そはただにその池に臨みたれば、名を泊酒舍となむいふなる。

そもく霞たなびく春のあしたは、をのへの木末をうつして、花

の鏡にむかひ、雁鳴きわたる秋の夕べは、雲間の影をうかべて、月の御船をとゞめ、あるは蓮花咲く夏の日、あるはみ雪降る冬の夜、折につけ、時に隨ひて、見る目のあはれなむ盡きざりける。あるじは深くみやび好める人にて、四つの時のあはれをすぐさず、こを古ざまの言の葉にのべて思をやり、又唐土風のしらべに習ひて、心をしも慰めけり。されば魂あへる人々花にあくがれ月にたどるも、常にこの伏屋をなむ訪ひ來にける。

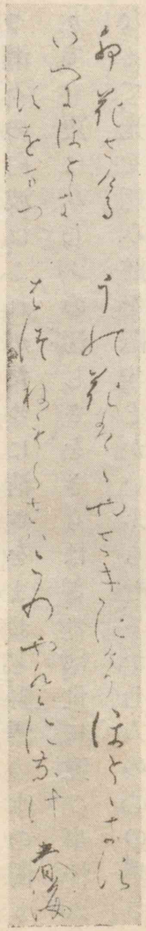
一日あるじいひけるは、世を經て絶えざるものは鳥の跡なり。いでこの屋の樂しみをも、人々とあひ睦べる心をも、長くうみの子のつぎ〳〵に傳へて、わが形見とせむことのゆゑよし記してよとあれば、卽ち筆さしぬらして、聊か物のはしに書きつく。寛政といふ年の七とせかんな月。

―「琴後集、卷之十」―

卯の花さける
いへにほと、
きすをまつ
うの花ははや
さきにけりほ
ときすはつ
ねをこそはこ
のやとになけ
春海

一二　對月言志

伊豫簾高うかゝげて、ふけゆく影をひとりうちまもりて、つらつら思ひみれば、自ら心の塵も名殘なくて、なべてよろづのことぐさこそ隈なく思ひいでらるれ。さるは、千種の花に露のにほひをそへ、絲竹の音の響をすますらむたぐひの、よのつねのをかしさをばさらにも言はじ。いでや、すみのぼる光の高くあらはれて、人の目とゞめむに眩きばかりなるも、時の間にあやなき霧のまよひにかきけたれてたゞ闇かとばかりたどり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西になることのとゞめがたきに、うき雲の定めなくて、昨



村田春海筆蹟

わが世の傾くを云々

「秋のはじめになりぬれば、今年も半ばは過ぎにけり、我がよふけゆく月影の傾く見るこそあはれなれ」（慈鎮）

老いとなるもの

「大方は月をぞめでじこれぞこの積れば人の老いとなるもの」（古今集、在原業平）

日は榮え、今日は衰ふる世の有様こそ、まづ覺ゆれ。又淺茅が露に宿れども、所せくもおぼえず、海原の波に浮びても、廣きを知られざるは、高きみじかき、おのがじしのすみかのきはゞにつけて、身のやすかる心しらひによそへつべきもあはれなり。また落ちたぎつ瀬々の白波は、これがために清さをませど、野澤の水の濁りに宿りても、更にみしぶの汚しさをきらはざるは、世に違ひ事忤ふことなくて、光を韜み跡を隱すとかいふらむ、さかし人の心の奥さへ汲みしられぬべし。また有るを有りとも見ず、無きを無しともさだめあへぬひじり心のさとりも、たゞこの光を磨きてこそ照すべけれ。かゝれば、徒らにわが世の傾くを歎き、老いとなるものとのみうちながめむは、いともいとも心あさしや。

大かたに見てやは過ぎむ空の月ちゞに心をおもひ寄せなば

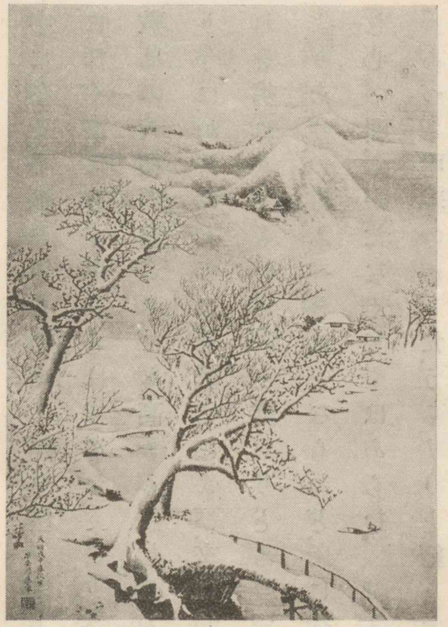
―「零後集、卷之十四」―

一三　雪をめでて

かきかぞふ四つの時につけて、村肝の心をやるわざなむ多かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪を喜ぶ三つのならはしこそ、世にたぐひなきすさみとはすめれ。ことさへぐ唐人のためしにも、敷島の大和の國ぶりにも、高きも賤しきもへだつることなく、古より今にかよはして、こを歌にによび、文に記してめであへるは、いづれを劣れりともいづれを勝れりとも、品定むべき類ならぬは、もとよりあげつらふべきことならねど、所に從ひ人によりて、おのがじし心の引くかたなくてやはあらむ。

あづさ弓春のあした、うら〳〵と紐ときそむる花の心をとはむには、まづかしこの野べこゝの山里、霞をしのぎ巖をたどりて、うるはしき蔭をもとめてこそ、類なき匂をも見るべけれ。おどろなる

垣根のうち、あやしき伏屋の前に、一木・二木を移し植ゑたらむは、なかなかに花のおもてをぞふせつべき。また眞萩咲く秋のさかり、くまなき月の光は所をわかねど、あるは高殿の簾をかゝげて、千里の空をのぞみ、あるは行く河のながれにうかびて、水底の影を弄びてこそ心の雲もはるべけれ。小家すき間なく立ちならび、ひろからずかこへる庭に、うづくまり居て見むには、塵・芥のけがれも、澄みわたる光にいよゝ現れゆきて、かへりては月うとかれとぞ覺ゆめる。かゝれば、月と花とは所がらこそ



雪景山水（圓山應擧筆）

あはれもうちそはるめれ。

さるは、この翁がたぐひの、身のほどの品いやしくして、せまく苦しき住家にのみかきこもり居つゝ、つねにやまひにのみかゝづらふ身は、かの高殿ののぞみ、船やかたのすさみは、いかでか思ひもかけむ。また野山のあそびも、おのづから時におくれ、折を過して、常に心にそむくふしなむ多かめる。かれ雪ばかりはこの二つに異なり、むぐらにとぢたる門のうちも、たゞ一夜のうちに玉しく庭とうつろひ、あばらなる板屋が軒も、時の間に白がねをちらせるばかりに、姿をかへもてゆきて、朝夕のいぶせさも更に覺えず。また目なれたる市の巷も忽ちに景色をそへて、いひ知らぬ山里の思をなし、行きかふ商人の蓑笠までも見所ありと覺え、はかなき木草萬づの物も、さながらめづらかなりとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境をうつし、所をかふるとやいふべからむ。かくてこ

そ心にたらはぬ事なく、外にうらやむべきふしもあらね。されば、この雪にのみわが心をよするも、所に隨ひ人によりたる老のすさみなるはや。

—「琴後集、卷之十」—

一四　月花のあはれ

花をめづらしみ、月をあはれむならはしなむ、流れての世はさらなる。その源を考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りにける。花に心を慰めましゝは若櫻の宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原奈良の御代に至りては歌人多くいで來て、かたみにみやびをかはし、心々に思ひを述ぶる事、皆月花をもて心の種とぞなしたりける。

かくて世の移るに隨ひて、このすさみいよ〳〵盛りになりもてゆきて、あるは物思ひなき春の花に悅び、加る老を月に歎き、あるは

若櫻の宮　履仲天皇の皇居。

朝倉の宮　雄略天皇の皇居。

藤原　持統、文武兩帝の皇居。

物思ひなき春の　「年ふれば齡は老いぬしかはあれど花を見れば物思ひもなし」（古今集、藤原良房）

さかしきも愚なるも便りなき所に花を尋ね、知るべなき暗に月をたどり、あるは花の命を神に祈り、月の行くへを佛に契り、また下が下なる薪こる山がつ、いぶせき伏屋の賤の女までも、月と花とに心を寄せざるなむあらざりけらし。さるは、かけまくもかしこき大御遊びのきはことなるが中にも、月と花とのためには、時に臨みて殊更にうたげの筵を設け給ふおきて違はず、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かく樣々なる世々の跡を見るに、古も今も、高きも短きも、月と花とをよろこびなもへる事ひとしくて、いづれを餘れりとし、いづれを足らずとして、一方に心寄せたる人誰かはあらむ。しかるを、今にありて、その善し惡しをことわりいはむは、人笑へにもなりぬべし。しかはあれど、これをことわるに故あり。その劣り勝りは、元より彼にはあらざめれど、己がじしうち見る人の身にたぐへ思はむには、そのよる方いかでかなからむ。

加る老を　「大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」（古今集、在原業平）

抑、花は春にありて賑はゝしきにより、月は秋にありて悲しみをぞ起すなる。今この朽ち翁が心にとりていはゞ、身既に老いにたれば、つぼめる花の盛り待ちいでむ樂しみもなく、品いやしければ、花々しき世を經て時にかをらむ願ひもかけず、唯鏡にうちむかふ折しも、頭の霜を見ては月の影かと驚き、かたぶく齡を思ひては入り方の月ぞ身によそへつべき。かゝれば、花には自らうとく、月にぞ心の引かれける。さはいへ、こは我が身一つのすさみなり。おほよそ人のためには、いかでまねびもいでむ。

―「琴後集、卷之十四」―

一五　芳宜園大人の靈を祭る

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを燒きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも。君は我に十といひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、我はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、朝にまゐるとては、君のみはかしのしりへに從ひ、夕べにまかるとては、君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとては我をおとゝひのつらにぞ教へ給ひける。

中ごろにして君は仕へへの道に暇なくおはし、我は世のさがにかかづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、我も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては、我道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふる業のまめごとも、あだごとも、かたみに隔てなく心をかはしつること、今にはたとせ。その初をくり返し

くひぜを守り
「宋人有レ耕レ田者一、田中有レ株一、兎走レ触レ株一、折レ頸而死レ、因釋レ其レ耒一而守レ株一、冀レ復レ得レ兎一、兎不レ可レ復得一、而身為レ宋國笑一。」（韓非子）

舟にきだつくる
「楚人有レ涉レ江者一、其劔自レ舟中一墜レ于水一、遽刻レ其舟一曰、是吾劔所レ従レ墜レ也、舟止従レ其所レ刻レ處一入レ水求レ之、舟已行矣、而劔不レ行、求レ劔若レ此、不レ亦惑レ乎。」（呂氏春秋）

數ふれば、あひ友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを今おくれたてまつりて、いつの世にか相見む。いづれの時にかこととはむ。常無きは人の身の習ぞと知れど、これをいかで歎かざらむ。かゝるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てゝ古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥み、こゝにひかれて、尚あやしみとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、いにしへぶりの歌世に盛りになりにたるなり。

その自らよみいで給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿、とりどりに備らざるはなし。その古を寫せるは藤原・寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは口に盡さざることなく、目に觸るゝものは言葉にのせざることなむあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじ。といひてぞ深く喜びける。

然るを、今、黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎きのみかは、おほかたの世の人の憂へともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ。かゝるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても見そなはせとなむ申す。

—「琴後集」、巻之十五」—

一六　伴蒿蹊に送る

秋の日かずも殘りすくなうなり侍りにたるを、都の御すまひよ、いかにあかし暮し給ふぞ。この遠のみかどは、大方に山いとはるかにて、露霜の心おそきならひに侍れば、立田姫のすさみもはかばかしうも侍らずなむ。さるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵に染み給はぬあたりは、何の山里くれの古寺、御心ゆくかたぞ多かりなむ。

都人いづれの山のにしきをか言葉の色にたぐへては見る

このころは、御手染のめづらかならむこそおほからめ。風のたよりをわすれ給はで示し給はゞ、下照るかげに伴なはれ侍らむ心地せむは、嬉しきわざなるべし。あなかしこ、立つ霧にな隔てたまひそや。

一七　正月ばかり山里人の許へ

年改りては何事かおはすらむ。春の日數もまだ淺きに、岡邊の下もえは今しも御袖にたまるばかりも、摘みそめ給ひつや。谷の戸の初音は、いつよりか御あさいの枕をばおどろかしまゐらせたる、いとなむゆかしき。こゝには去年の雪のなごりにや、風のけしきも冬めきて、猶霞みもやらねば、巷の柳のうち煙りゆかむ程も、心もとなう見え侍り。さるは一年、籬のもとに移し植ゑ給へるしも、雪のうちよりもいち早くゑみ榮ゆとなむのたまはせし。この頃こそ心ことにも匂ひ出で侍らめ。いかで一枝をと思ひ侍るを、ゆるし給はましかば、いとうれしうなむ。

*しる人のたぐひならねど梅の花色香をわれに惜し

—「琴後集、巻之十三」—

しる人の「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（古今集、紀友則）

まずもがな

一八　上田秋成が許へ

春立ちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。今は巖の中なるすまひをふり捨て給ひて、ちまたの花柳に立ちまじらひ給ふらむは、いかに心ゆく御住みかならまし。

すごもれる谷の鶯いかなれば都の春にこゝろひかれし

となむ聞えまほしき。されど浮世の塵ののがれがたなるも、猶市の内に隠れけむ古人のためしにならひ給ふべければ、世のさがしらぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらむは、山ずみのつれ〴〵ならむよりはと、おしはかり参らするものから、いたづらに千里のよそにありて、萬づまのあたり聞え承らぬこそ飽かぬわざなれ。さは

市の内に隠れけむ古人「小隠隠ニ陵藪ニ、大隠隠ニ朝市ニ。」（康瑤）

―「琴後集、巻之十三」―

いへ、雁の翅の行きかひだに絶えずば、なか〴〵に遠くて近きたぐひとや思ひ慰み侍らむ。柳の絲のくりかへしつゝ、今年もとだえなく聞え参らせばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音なをしみたまひそ。

―「琴後集、巻之十三」―

加藤千蔭

通稱を又左衞門といひ、芳宜園と號す。幼より父枝直に就いて和歌を學び、十四歳の時より賀茂眞淵の門に入りて古學を修め、歌文に長じ、能書の譽高し。父の職を承ぎて町奉行與力となり、吏務多忙を極めたれど、歌學の研鑽を怠らず。天明八年職を辭し、爾來その好むところを專らにして、學業愈進み、名聲海内に籍甚たり。その斷金の友たる春海と竝び稱せられて、當時關東國學の泰斗たり。文化五年歿す、年七十五。

うけらが花、七卷。享和二年刊。うけらが花、二編、七卷、文化五年刊。和歌文章の選集にして、共に第七卷の半ば迄は和歌を收め、以下、文章を收めたり。

春雨夜靜
とぶほたるの鳴
虫もなき春の
夜の霞よりふ
る雨のしづけ
さ　枝直

一　父の歌集

ちゝのみの父の翁、神風の伊勢の國に生れ出でて、祖父翁、歌をしも好みよまれしによりて、いと若かりし程より、歌になむ心を寄せられけるとぞ。ゆゑよしありて、此處にまゐ來て、公の暇なかりつれど、家に歸りては、たゞ燈火の下にして、古今のふみ見、あるは獲がたきをもあさり出でて、自ら數多の卷々を書きうつし、また歌つくりて、思をのべられけり。

加藤枝直筆蹟

常にいへらくゝ日毎にまどころのみ門出づるより、やがて歌を考へ、道すがらも、心の中ににによびつゝまかづれば、自ら心も靜けく清

らになりぬ。」といはれき。千蔭九つの歳より歌つくることを教へたまひて、やゝおよずけゆくまゝに、歌てふもののたふとむべき理をしめし給ひぬ。千蔭十あまり四つの歳にかありけむ、縣居の大人をちか鄰に招きすませて、かたみにむつみかはされつゝ、千蔭は彼の大人の教を受けよとてなむ、名簿おくらしめたまひける。

父翁七そぢあまり二つの齢にして、ねぎごとのまゝに仕を退き給ひては、殊に歌にのみ遊び給へりければ、歌の數いとさはになりにけり。さるを、八十ぢばかりにして、彼の歌をも文をも、自らえり出でて、その年々を別ちて、東歌と名づけおかれたるさうし、六つ七つありて、そのもとの集どもは、何時ばかり燒いすてられしにか、今求むれどもなし。そのあづま歌としるされたる中にも、なほ心にかなはざるやありけむ。多く消しものし、あるは二とせ三とせが程、歌はいと少くて、萬葉集の歌をまねび作るを、ひたぶるに珍らかなることに覺えて、古き歌の調整らぬをさへに、まねび見つるを、後に見れば、うるさくて、皆すてつ。」など、しるし置かれつるもありけり。

父翁、天明の五年といふ年の八月十日に、九十ぢあまり四つの齢にてみまかられし後、彼の東歌を板にゑりて、うからやから、はたをしへ受けし人々にもわかちてむと思へりしかど、その頃は公の暇なかりしかば、さることもなし得ざりし程に、今年十あまり七とせになむなりにける。いでやとて思ひおこして、四つの時などわかちて、長歌・文らまで、千蔭寫しとりて、板にゑりぬ。はた、くさ〳〵書きつめ置かれつるものゝ、散りぼへるもこゝらあるは、なほ次々にものしてむ。

かく書きつむるにつけても、むかし、千蔭をおふしたて、教へ諭し給へりしことどもの、歌にもこと書にも、こゝかしこに見ゆるに、ただ涙のみこぼるれば、をぢなきが上に、いとゞたど〳〵しさぞそは

りぬる。さてつねのことぐさに「歌はすてずしてよみてよ。歌よみての德は、年老いて後知らるゝことなれば、今はいはず。」といはれき。今なむ千蔭數ならずして、月花のすさみうとからぬにつけても、彼の教のかしこさをなむ、思ひあはせられぬる。かれ、聊か恩頼に報いむとてなりけり。

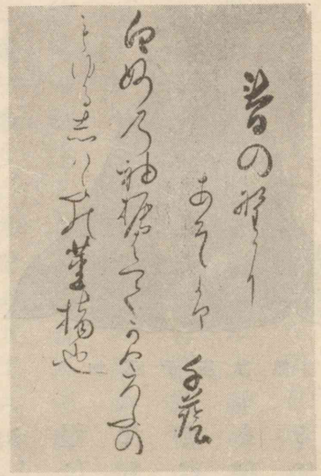
—「東歌」—

二　縣居の翁

千蔭いと若かりしより、大人にしたがひて、常の御有樣、のたまへりしことを、親しく見もし聞きもしつるに、大人は今の世の人とは異にして、うち見には、さかしき方はおくれて、心おそきさまにおもはれしかど、たまさかにいひ出でたまへることに、敷島のやまと心をあらはし、一言としてみやびならざることなかりき。

筆とりて、もの書きたまふを見るに、五百年も經にけむ筆の跡の

如くなむありける。こはあまた年、夜晝となく、古言をのみ心にしめて、家居より調度にいたるまで、古によりて、いさゝめにも後の世の事を耳にふれ、心にとめたまはざりしかば、自らいにしへ人の心になりもてゆきて、その心よりいひ出でもし、物書きもしたまひしによりてこそ、しかありけるならめ。かく古につとめたまひし中にも、歌をば殊に心高くもてつけてものせられたれば、歌一つよみ出でたまへるにも、深く考へあまたたび味ひて、ものせられしなりけり。



加藤千蔭筆蹟

春の野にあそぶ千蔭
白妙の袖振はへてかけろふ
のもゆるしはふの葦摘也

歌のさまは、はじめと、中頃と、末と、三つのきざみありき。はじめの程は、物學びたまへる荷田東麻呂宿禰の歌のさまにかよひて、は

なやぎ手弱きさまなりしを、中ごろより自らの一つの姿となりて、みやびにして、調高く、しかもをゝしきすぢをよみ出され、齡の末に至りては、いたく思ひあがりて、設けず飾らず、たれも心の及び難きふしをのみ作られき。そのはじめの程なるも、藍より青しとか、宿禰よりもたちまさりてぞ聞えし。をりにふれては、古事ぶみのいとあがれる世のさまなる、又古の祝詞になぞらへたる、あるは中つ世の催馬樂のうたひものをまねびたる、あるは物語書によりたるなどは、その代々の人のいひいだせるに異なることなくなむありける。

藍より青し
「青取之於藍而青於藍」（荀子）

加藤千蔭肖像

こゝに平の春海の翁、わらはより大人に從へりしによりて、大人のみまかられし後、家の集ども、はたくさ〴〵のちりぼへる文らを、この翁が家にをさめおけるをかき集めて、板にゑりなむとせしに、障る事ありて年月經にけるを、更におもひおこして、歌に文に、くさぐさの問答をさへにとりとゝのへて、十卷とはなしぬ。

そも〳〵大人の遠つ祖を尋ぬるに、賀茂の縣主成助の裔にて、世世山城國相樂郡賀茂の大神の御奴なりしを、師朝といひし世に、文永の十一年、遠江國敷智郡濱松の莊岡部の郷なる、賀茂の新宮をいつきまつるべきよしの勅命を蒙りて、彼の郷をたまはり、卽ちその新宮の神主となりて、世々を經て、政定といひしは、引馬の原の御軍に從ひ奉り、いさをありて、みはかしの太刀・甲を賜はりぬ。大人は彼の政定より四つぎのうま子定信といへるが子にて、元祿の十年、岡部の郷にて生れたまひて、享保の十八年に京に上りて、荷田の宿禰の教を受けたまひ、寛保の三年に、江戸にまゐ來たまひしを、延享

の三年に、田安の殿より召されたまひて、古の書の道の博士として、殊にめでさせられたまひき。大人齢老いて、申文奉り、寶暦の十年に仕を退きて、明和の六年十月晦日に、七十あまり三つの齢にてみまかりたまひ、江戸の南荏原の郡、品川の東海寺なる少林院の山にはふりぬ。眞淵といへる御名は、敷智の郡の名より思ひよりてつけたまへりとぞ。縣居とは、うつせみの世にましゝ時、庭を田居のさまにつくりて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、自ら家の名におほせられたるなりけり。

―「うけらがはな、卷之七」―

三　紅梅をめづる辭

梅の宴　天平二年正月十三日、大宰帥大伴旅人の邸に於ける梅花宴。

咲く花の匂ふが如くといひけむ奈良の御時、しらぬひの筑紫の大みこともちの館に、下つ司人らをつどへて、梅の宴し給へりしを古きためしにて、世々この花をなむめでゝあへりける。

おほよそ草木の花の、天地のなしのまに〳〵咲きいづるに、くさぐさの色ありといへど、白妙なると、紅なるとにまされるしもあらざりけり。そが中にもけぢめありて、百入・千入に色こきは、こちたくうたてありて、かしこきはの衣の色めにさへかよへばにや、戯れにくく、あら染めの淺らかなるは、下が下の短き袖おぼえて、品おくるゝかたになむ思はるゝ。たゞ梅のゆるし色なるが、おのづから花びら毎に光こもりて、その香さへこよなきにしくものやはあるべき。

こゝに、紅の梅を植ゑて、年のはに花の盛りにはみやび男の友をつどへて、その花めづる人なむありける。今年きさらぎ半ば過ぐる頃、いざといふまゝに、かのやどりを訪ふに、廣らかなる壺の中に一本立てるが、高き屋の軒のつままでおひのぼりて、その枝はしみみに廣ごり、その花はをゝりにをゝり、思ふ事なげに咲きみちつゝ、

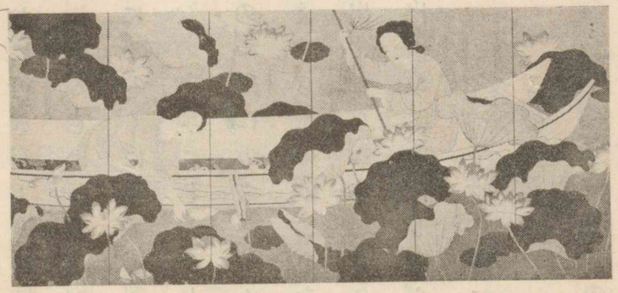
おばしまに倚りゐる人々の面わにてり、衣手にくゆりかゝれり。かの筑紫の館には紅なるやなかりけむ、たゞ雪にまがへるをのみめであへるは、飽かぬすさびにこそおぼゆれ。ひねもすあからめもせで、うたひ出づらく、

菅の根の長き春日も紅の梅さくやどは立ちうかりけり

―「うけらがはな、巻之七」―

四　泊洒舎にて蓮を見る辭

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水のほとりに、さゞなみや志賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。白妙の富士のみ雪も消え、おらがねの土さへ裂くといふなるころ、人皆すゞみせむとてそのやどりにつどひて、高きやにのぼりて見渡せば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにてはありける。



紅蓮　（菊地契月筆）

おひたてる葉のひろごりたるは、宮路行くうまびとのきぬがさの如く、浮きたるは、大庭に百の司のわらふだ敷並べたるごとく、葉における露は、白玉の五百つどひを解きみだしたるになむ似たりける。池の水清らに澄みて、遊ぶいろくづ思ふことなげなり。

人々衣の紐解きさけ、おばしまに寄りゐて酒酌みかはすほど、彼の岡の木高かる瑞枝吹きこす風のすゞしきに、えならぬ香のかをりくるもたとしへなしや。彼方の岸より中島まで長き堤をつきて、石もて造れる橋かけわたせるは、も

西の湖　支那、浙江省杭州府に在り。

ろこしの西の湖とかいふめる處のさまかけるかたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖にほひさへなつかしく見ゆ。

あるじはわが國ぶりの歌つくり書見ることをしも好めるが上に、ことくにの書をさへに、あしたゆふべの友とせりければ、さるかたの友垣にしも乏しからず。から歌好める某の博士は、さにぬりの小舟にからをとめ載せて、この花折らせまく思ひ、日の入る國のますらをの法に心を寄するは、「これぞこの上の品のうてなにあれ出でたらむ心地する。」などいひあへりけり。人々心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世の濁にそまで住む人の友と見るべき花ぞ

この花

かくて上野の岡の入相の鐘、木の間しのぎてひゞきわたれば、みさかりに開けたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりたるもあはれ深かるものから、遠方の梢の鷺すらねぐらもとむるものをとて、人々あかれかへりぬ。

―「うけらがはな、卷之七」―

五　初雁を聞く辭

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、獨り高き屋に登りて、七つのをの琴をかきならしつゝ、秋の風のことばをうそぶき出せる折しも、遠つ人初雁がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ見さくれば、姿は雲路になむ消えうせぬる。

いでや白雪のふるとしよりもはねならはしつゝ、かげろふの春立ちそむるあしたの日影うらゝと打霞めるに、軒近き篁にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより、笠にぬふてふ花のかをりみてる枝に來ゐつゝ、ほこりかにさへづるはめでたきものから、雲にたぐへし櫻も散りすぎて、青葉しげき木の間

笠にぬふてふ　「青柳を片絲によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」（古今集、讀人知らず）

を立ちくぐ聲のむくつけきには、「待たるゝものは。」といひしに引きたがへてぞ覺ゆるかし。

池の藤波夏かけて匂へる頃、ほとゝぎすのそれかあらぬかとたどらるゝ一聲より、花橘のゆくりなく香ににほへる曙、有明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過ぎゆくは更なり、小雨そぼふるゆふべ、物おもひにいを寢ずして更けすぐる夜半に、をち返り鳴くを誰かあはれと思はざらむ。しかはあれど、山かたつけるわたりには、こちたきまで飛びかひつゝ、梢にしもおりゐて高やかに鳴きとよめるなどは、「今一聲の。」といふべくもあらずうれたきや。

待たるゝものは「あらたまの年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲」（拾遺集、素性法師）

今一聲の「行きやらで山路くらしつ時鳥今一聲の聞かまほしさに」（拾遺集、源公忠）

蘆雁（晴湖筆）

そも〳〵雁は常世の國をや出でけむ、三越路よりや來ぬらむ。或時は眞木たてる荒山のあしたの霧にむせび、或時はみるめ刈る八潮路のゆふべの涙をつばさにかけて、草の枕だに結びあへず。天路遙かに思ひあがりて、夕暮の雲の旗手に、聲は小舟こぐ唐櫓に通ひ、姿は薄墨にかける文字に似て、ひとつら過ぎゆきつゝ、をちかたの田づらに落ちくるさまさへおほどかにして、その時しも荻の葉に音なふ風、萩が枝に亂るゝ露、隈なき夜半の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たび打ちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなる折に逢ひぬるが、限りなくめでたくなむ。また別けていぬる春べには、花を見すつるなど咎むめれど、しづけかるみ山の花をつばさにしめむとて、都の空をいそぐならむと思へば、そもはた憎からずこそ。雁よ、雁よ、なれこそはわが思ふどちなりけれ。

われもいざ秋をあはれぶ友どちのつらには漏れじ

花を見すつる「春霞立つを見すてゝ行く雁は花なき里にすみやならへる」（古今集、伊勢）

天つかりがね

六　蟲選の辭

秋のあはれは蟲の音ばかりなるぞなき。いで武藏野の原にしもきゝてむ、家づとにもしなむとて、は月の廿日ばかり、白妙の袖ふりはへ、ぬば玉の駒なめつゝなむ行き行く。ふぐし持たるをとめに問へば、こゝなむ武藏野の原なりといふ。

かぎりも知らぬあさぢ生のうへに、たゞ富士のねのみぞいちじるき。かくて見渡せば、ゆふべの霧はものゝふの小手指原にたち、入る日の影は赤駒の足柄山にかくろひぬ。やがて野づかさにおりたちつゝ、ついまつふきたてゝ、さかなまうぼり、汲みかはすほどに、月はる〳〵と澄みのぼれば、おける露原みな玉をしきなせり。

この野らのさまは、人のかたれるよりもけにかぎりなく、鳴く蟲

小手指原　武藏國入間郡、所澤の西一里のところ。

—「うけらがはな、卷之七」—

の聲は都にて聞きつるよりもいとことにて、ますらをと思へる人人らも、えたへぬなげきをなむしける。

うけら・かるかや・はぎ・すゝき分けに分けて、をちもこのももあさるまゝに、千々の蟲はかず〳〵の籠にみちにたり。そも〳〵ことせきつぼのうちの草むらにきゝて、秋のおもひをやらむよりも、かく大野の心もひろに出でたゝむこそ、まことにますらをのあそびなりけれ。かくしつゝ秋てふ秋はとひ來らむと、野守のをぢにいひて、うちつれて歸りぬ。

むらさきの根はふ萱はらいりみだれ秋なく蟲のこゑをきくかな

—「うけらがはな、卷之七」—

七　石濱の雨

八月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほ

石濱　淺草寺の北、眞土山、今戸、橋場邊の總名、千蔭は此處に別邸を有したり。

とり、石濱の庵にゆきて宿りぬ。在明の月のにほひも、霧たちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼふる日なむ、殊にあはれは深かりける。

もとより萱葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろ〳〵と散るもあはれなり。水の面は動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈の一筋はさしひく汐にもまじらで、とはに縹の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ちくるならむ。

うち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひま〴〵より長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう〳〵に薄墨もてかきけちたらむ如く、いとしもはるけきは、たゞなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。ここかしこより、鳥の飛びゆきつゝ、堺の鷺の翅重げに起きいでて、河の瀨の眞菰におり立てば、みさごの群れきて、水の面に浮べるもをかし。

（筆且雪川谷長）御厩河岸渡

上つ瀨より、筏師の簑笠きて、棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて、思ふ事なげにて居り、筏は水のまに〳〵、流れゆくもしづけし。渡守、舟さしいだせば、大笠傾けて渡りゆく人の、やがて堤をあるくさまも繪によく似たり。

すべて、一日の中に、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも

風通ひきて、岸の木立も長き堤も、あるはあらはれあるはかくれて、限りなき青海原に向ひたらむやうに覺ゆる折もありけり。かくて、やゝ夕ぐれ近くなりゆけば、群鳥のおのがじしねぐら求むるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはむ方なし。暮れはてても、なほ行く水の色のみ遠白くのこりて、川ぞひ小田にいはへる水分の神の御火の、あまのいさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川たが墨がきのすさび
なるらむ

—「うけらがはな、卷之七」—

八　秋のおもひ

秋の夕暮をあはれなる時の限りにはいふめれど、なほ朝のけしきこそよなけれ。夜いたう更けわたりて、軒端の荻の風もしづまり、叢の蟲の音もよわりはてぬ。ながくし夜のあくるを待ちわびて、遣戸ひきあけて、やをら見いだせば、野らとなりぬる庭の淺茅に、おきわたしたる露は、ま白に見ゆるものから、雪にもあらず、霜にもあらで、おのづから光を含み、おくが上にいやおきそひて、所狹うこぼれもあへぬに、薄霧をもるゝ在明の月の、露てふ露をとめて、はかなげに、影をうつせるを見れば、いつとなく袖にさへこぼれかかれり。こゝら在り經し世には、うき事もありつれど、またうれしきふしにも、樂しき事にも、數多あひぬるを思ひ出ぐさにて、とはに心を慰むるものを、なににかく涙の落つるならむと、我ながらあやしう、

ありあけの月かげうつる白露のなどかくばかり身
にはしむらむ

—「うけらがはな、第二編、卷之七」—

九　山里の月

耳になり弭の音を聞かず、目に旗手のなびきをしも見ぬ御代にあひては、何事につけても、憂しとわびしとうらみかこつべき事やはある。されば、世を避くとしもあらねど、市の巷に近き賑はしさを厭ひて、この山里には移ろひ住めるになむありける。

秋こそことにといへるも宜なるかな。籬の下にたゝずめる小鹿、松に木傳ふ猿の聲も、獨りある人を慰むるに似てあはれなるに、茜さす日も入りはて、杣人の斧の響たえて、端山の峽より月さしのぼれば、そがひの嶺より落つる瀧つ瀬は、こがねの色の絲ひきはへたらむ如く、岩に碎くる水は、白玉をこきちらすとぞ疑はるゝ。とこしへに清らにして、物に滯ることなきを、わが心とはせむと思ふにたぐへてむものは何ぞ、たゞ月と瀧つ瀬とのみ。―「うけらがはな卷之七」―

秋こそことに　「山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ」（古今集、壬生忠岑）

一〇　山水のかた寫したる繪を見る

文机に據りゐつゝ、程なき壺の中の草木をのみ憐みて、思ひたらはせるにしもあらず。名ぐはしき吉野の山の奥をとめ、久方の天の橋立を尋ね、常磐なる松が浦島に渡りてぞ、心ゆく限りなるべきを、遠く出立たむもいたづかはしく、物憂ければ、いぶせき庵の中に籠らひ居るよ。ますらをのとごころなしとやいはむ、そもまた己がさがなれば、いかがせまし。

いでや山田のそほどといへる神の、足行かずして、千里の外まで心を放ちやりてむわざもがなと、思ひめぐらして、山と水との姿を壁に繪がかせて、心をしづめて打對ふに、岩がねのこゞしき嶺より漲り落つる瀧つ瀬あり、かたへの岫より横切り渡る白雲に、半ば絶えて、麓に落ちくるはその響聞きつべく、そが末つ方は道の面に造

り出せる檜皮屋のもとまで流れたり。すだれ高く捲きて、三人四人思ふ事なげに語らふさまを見れば、我も其の人々に交らひ居る心地す。木高き松に日蔭生ひたれて、梢にはましら群れゐつつ、木の實とりはむなどをかしきや。九十九折なる山路を、手束杖曳きて登り行く人あり。童子琴を抱きて隨へり。いづこへ行くならむと見れば、山の半らばかりの平ら

樓閣山水　（谷文晁筆）

かなるに、黒木もて四阿屋造りて、獨り笛吹きすさべる人の許をさして訪ふなめり。遙かに木立打烟れるひま〳〵に、小さき家居見えて、細き柵橋渡したるを、駒に乘りて行くあれば、みなぎはの蘆間に小舟浮べて、さで差卸し、あるは釣垂るゝなども見ゆ。朝な夕なこを見れど、あかぬ餘りに、かの瀧のもとなる人の心を詠みける。

心さへ澄みわたりけりとこしへにみなぎる瀧の音になれつゝ

笛吹きゐたる奥山人の心を

わが山の松の嵐よ世の中に笛のねをだにさそはず

もがな

―「うけらがはな、卷之七」―

本居宣長

享保十五年伊勢國松阪に生る。鈴の屋と號す。京都に出でて堀景山に儒學を聽き、武川幸順に小兒科の醫術を學び、二十八歳の時歸鄕し、爾來醫を以て業とす。在京中契沖の著述を讀みて國學に志したるが、賀茂眞淵の冠辭考を繙くに及びて、益〻古學に心を潛むるに到れり。三十二歳の時松阪に宿りたる眞淵に始めて面會して、古事記研究の必要を力說せられ、その門下生となり、古事記研究、古道の闡明を以て終生の事業とす。一世の大著述古事記傳は、三十五歳の時起稿し、六十九歳の時成りたるものにして、その間實に三十五年の星霜を閱したり。この外、國語學、國文學、神道、歷史等各方面の著述甚だ多く、今皆收めて、本居全集中に在り。宣長の門

人は全國に洽く、學風永く後世に傳れり。享和元年歿、年七十二。

玉かつま、十四卷、及び目錄一卷。宣長が備忘錄風に書き置きしものを、版行の爲め自ら抄錄したるものなり。宣長の歿後、文化七年に刊行完了したり。

鈴屋集、九卷。宣長の歌文集にして、卷六、卷七の兩卷及び卷九の後半部は文章を載せ、他は和歌を收む。寬政十年より次第に刊行せられたるものにして、宣長の歿後享和三年に刊行完了したるなり。

菅笠日記、二卷。明和九年三月吉野旅行の際の紀行文なり。寬政六年刊行。

一　花の雪

やよひのころあるところにて、さくらの花の木のもとに散りしけるを見て、一とせよし野にものせし時も、多くはかうやうにこそ散りぬるほどなりしかと、ふと思ひ出でられけるまゝに、

ふみわけし昔こひしきみよし野の山つくらばや花のしらゆき

―「玉かつま、卷之九」―

本居宣長肖像

二　忘れ草

からぶみの中に、とみにたづぬべきことのありて、思ひめぐらすに、そのふみとばかりはほのかにおぼえながら、いづれの卷のあたりといふこと、さらにおぼえねば、たゞ心あてに、こゝかしこと尋ぬれど、え見出でず。さりとて、いと數多ある卷々を、はじめよりたづねもてゆかむには、いみじくいとまいりぬべければ、さもえものせず、つひに、空しくてやみぬるが、いとくちをしきまゝに、思ひつゞける。

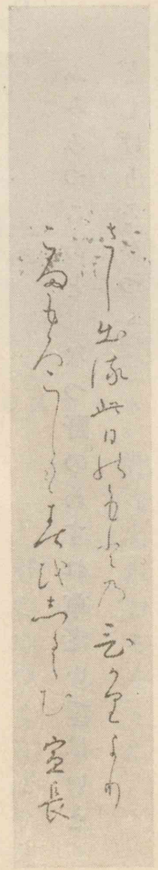
ふみみつるあともなつ野のわすれ草老いてはいとどしげりそひつゝ

もとより物おぼゆること、いとともしかりけるを、この近き年頃となりては、いとゞ何事も、たゞ今見聞きつるをだに、やがてわすれがちなるは、いと〳〵いふかひなきわざになむ。

―「玉かつま、卷之四」―

三　學問

世の中に學問といふは、からぶみまなびの事にて、皇國の古をまなぶをば分けて、神學・倭學・國學などいふなるは、例のから國をむねとして、皇國をかたはらになせるいひざまにて、いと〳〵あるまじきことなれども、古はたゞから書學びのみこそありけれ。御國の學びとては、もはらとする者はなかりしかば、おのづからしか言ひならふべき勢なり。しかはあれども、近き世となりては、皇國のをもはらとするともがらもおほかれば、からぶみ學びをば分けて、漢學儒學といひて、此の皇國のをこそうけばりて、たゞに學問とはいふべきなれ。佛學なども、他よりは分けて佛學といへども、法師のともはそれをなむたゞに學問とはいひて、佛學とはいはざる、これ



さし出る此日のもとのひかりよりこまもろこしも春をしるらむ　宣長

本居宣長筆蹟

然るべきことわりなり。國學といへば、尊ぶかたにもとりなさるべけれど、國の字も事にこそよれ、なほうけばらぬいひざまなり。世の人の物いひざま、すべてかゝる詞に內外のわきまへをしらず、外國を內になしたる言のみ常に多かるは、からぶみをのみよみなれたるからの、ひがことなりかし。

—「玉かつま、卷之二」—

四　わがをしへ子に戒めおくやう

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に又よき考のいできたらむには、必ずわが說にななづみそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人を敎ふるは、道をあきらかにせむとなれば、かにもかくにも、道をあきらかにせむぞ、吾を用ゐるには有りける。道を思はで、いたづらにわれを尊まむは、わが心にあらざるぞかし。

—「玉かつま、卷之二」—

五　道のひめごと

いづれの道にも、其の大事とて世にひろくもらさず、ひめかくす事おほし。まことに其の道大事ならば、殊に世に廣くこそせまほしけれ。あまりに重くして、たやすく傳へざれば、せばくなりて絶えやすきわざぞかし。そもみだりにひろくしぬれば、其の道かろがろしくなることといふなるも、一わたりはことわりあるやうなれども、たとひかるゞ〳〵しくなるかたはありとても、なほ世にひろまるこそはよけれ。廣ければ、おのづから重きかたはあるぞかし。いかにおも〳〵しければとても、せばくかすかならむは、よきことにあらず。まして絶えもせむには、何のいふかひかあらむ。されど近き世に、道々に祕傳・口訣などいふなるすぢ、多くは道を重くすといふは、たゞ名のみにて、まことは人にしらさずて、おのれひとりの物にして、世に誇らむとするわたくしのきたなき心、又それよりもまさりてきたなき心なるぞ多かる。さるたぐひも、もろ〳〵のはかなき伎藝の道などは、とてもかくてもありぬべけれど、うるはしくはか〴〵しき道には、さること有るべくもあらず。

—「玉かつま、巻之九」—

六　書うつし物かくこと

ふみをうつすに、同じくだりのうち、あるはならべるくだりなどに、同じことばのある時は、見まがへて、その間なることばどもを寫しもらすこと、つねによくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへしては、その間一ひらを、みながら落すこともあり。これらつねに心すべきわざなり。又よく似て、見まがへ易き文字などは、ことに紛ふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しが

きのみにもあらず、おほかた物かくに心得べきことぞ。すべて物をかくは、事のこゝろをしめさむとてなれば、おふなおふなもじ定かにこそかゝまほしけれ。さるを、ひたすら筆の勢を見せむとのみしたるは、いかなることとも、よみとき難きが世に多かる、あぢきなきわざなり。常にかきかはす消息文なども、文字よみ難くては、いひやるすぢゆきとほらず。よむ人はた苦しみて、頭傾けつゝ、かへさひ讀めども、つひによみえずなどしては、こゝよみがたしとかへし問はむも、さすがになめしきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては、事たがひもするぞかし。

—「玉かつま、卷之六」—

本居宣長遺愛の鈴

七　兼好法師が詞のあげつらひ

兼好法師がつれ〴〵草に、「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは。」とかいへるはいかにぞや。古の歌どもに、花は盛りなる、月は隈なきを見たるよりも、花のもとには風をかこち、月の夜は雲をいとひ、あるは待ちをしむ心づくしを詠めるぞ多くて、こゝろ深きも殊にさる歌に多かるは、皆花は盛りをのどかに見まほしく、月は隈なからむことを思ふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを歎きたるなれ。いづこの歌にかは花に風を待ち、月に雲を願ひたるはあらむ。さるをかの法師がいへる如くなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心のつくりみやびにして、まことのみやび心にはあらず。かの法師がいへる言どもこのたぐひ多し。皆同じことなり。すべてなべての人の願ふ心にたがへるを、みやびと

するは、つくりごとぞ多かりける。人の心は嬉しきことはさしも深くは覺えぬものにて、たゞ心にかなはぬことぞ深く身にしみてはおぼゆるわざなれば、すべてうれしきを詠める歌には、心深きは少くて、心にかなはぬすぢをかなしみうれへたるに、あはれなるは多きぞかし。さりとて、わびしく悲しきをみやびたりとて願はむは、人のまことの心ならめや。

また同じ法師の、「人はよそぢに足らで死なむこそ、めやすかるべけれ。」といへるなどは、中頃よりこなたの人の皆歌にも詠み、常にもいふすぢにて、命長からむことを願ふをば、心ぎたなきこととし、早く死ぬるをめやすきことにいひ、この世を厭ひ捨つるをいさぎよきこととするは、これ皆佛の道にへつらへるものにて、多くはいつはりなり。言にこそさもいへ、心のうちには誰かはさは思はむ。たとひまれ〳〵にはまことにしか思ふ人のあらむも、もとよりの眞心にはあらず、佛の教に惑へるなり。人の眞心はいかにわびしき身も早く死なばやと思はず。命惜しまぬものはなし。されば、萬葉などの頃までの歌には、たゞ長く生きたらむことをこそ願ひたれ。中頃よりこなたの歌とは、その心うらうへなり。すべて何事もなべての人の眞心にさかひて、異なるをよきにするは、とつ國の習のうつれるにて、心をつくり飾れるものと知るべし。

—「玉かつま、卷之四」—

八　しづかなる山林を住みよしといふ事

世々の物しり人、又今の世に學問する人なども、みなすみかは里とほくしづかなる山林を、すみよくこのましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず、たゞ人げしげくにぎはゝしき處の好ましくて、さる世ばなれたる處などは、淋し

くて心もしをるゝやうにぞおぼゆる。さるは、まれ〳〵にものして、一夜たびねしたるなどこそは、めづらかなるかたにをかしくもおぼゆれ、さる處につねにすまゝほしくは、さらにおぼえずなむ。人の心はさま〴〵なれば、人うとくしづかならむ處をすみよくおぼえむもさることにて、まことにさ思はむ人もよには多かりぬべけれど、又例のつくりごとの漢ぶりの人まねにさいひなして、なべての世の人の心とことなるさまにもてなすたぐひも、中には有りぬべくや。かく疑はるゝも、おのが俗情のならひにこそ。

—「玉かつま、巻之十三」—

九　富貴を願はざるをよき事にする論

世々の儒者身のまづしく賤きをうれへず、とみ榮えをねがはず、よろこばざるをよき事にすれども、そは人のまことの情にあらず。おほくは名をむさぼる例のいつはりなり。まれ〳〵にさる心ならむ者ありとも、そは世のひがものにこそあれ、なにのよき事ならむ。ことわりならぬふるまひをして、あながちにねがはむこそはあしからめ。ほど〳〵につとむべきわざをいそしくつとめて、なりのぼり富みさかえむこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。身おとろへ家まづしからむは、うへなき不孝にこそ有りけれ。たゞおのがいさぎよき名をむさぼるあまりに、まことの孝をわするゝも、またもろこし人のつねなりかし。

—「玉かつま、巻之三」—

一〇　後の世は恥づかしきものなる事

安藤爲章*が千年山集といふものに、契沖の萬葉の註釋をほめて、「かの顯昭・仙覺が輩をこの大德になぞらへば、あだかも駑駘にひとしといふべし。」といへる、まことにさることなりかし。そのかみ、顯

安藤爲章　年山と號す。德川光圀に仕ふ。契沖に就きて學び造詣深し。

昭などの説に比べては、かの契沖の釋は加ふべきふしなく、事盡きたりとぞ誰も覺えけむを、今またわが縣居大人に比べて見れば、契沖の輩もまた駑駘にひとしとぞいふべかりける。何事もつぎつぎに、後の世はいと恥づかしきものにぞありける。

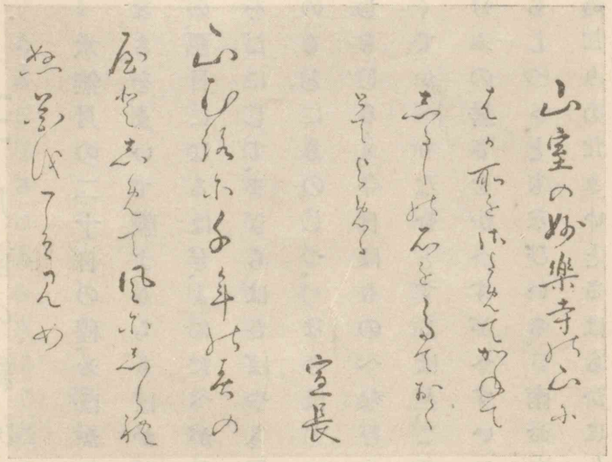
―「玉かつま、卷十之一」―

二　古よりも後世のまされる事

古よりも後世の勝れることとよろづの物にも事にも多し。その一つをいはむに、古は橘をならびなきものにして愛でつるを、近き世には密柑といふものありて、この密柑にくらぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。その外、柑子・柚・九年母・橙などのたぐひ多き中に、密柑ぞ殊にすぐれて、中にも橘によく似てこよなくまされるものなり。これの一つにて推しはかるべし。或は古にはなくて、

山室の妙樂寺の山にはか所をさためてかねてしるしの石をたておくとてよめる　宣長

山むろに千年の春のやどしめて風にしられぬ花をこそ見め



本居宣長筆蹟

今はあるものも多く、古はわろくて、今のはよきたぐひ多し。これをもて思へば、今より後もまたいかにあらむ。今に勝れるもの多く出でくべし。今の心にて思へば、古はよろづに事足らずあかぬこと多かりけむ。されど、その世にはさは覺えずやありけむ。今より後また物の多くよきが出でこむ世には、今をもしか思ふべけれど、今の人事足らずとは覺えぬが如し。

―「玉かつま、卷之十四」―

二　月前の納涼

水無月の二十日の程、おほかたもこの頃は暑さところせきほどなるを、まいて朝よりちりばかりもくもりなく、てりはたゝく日影の、西日になるほど、よにたへがたくて、思ふどちうちとけたる物語をだにして、まぎらはさばやと思ひて、むつまじく相語らふ友だちのもとにものしつ。なきほどにやあらむと、おぼつかなくおもひしもしるく、「今日はものへなむまかりぬる。」といふに、いとくちをしくて、かへりなむとするほど、このあるじかへり來て、まづ見るより、けふの暑さをかへすがへすいひつゞけ、あせおしのごひ扇うちならしつゝ、ともなひいる。南おもてなるところ、いよすかけわたし、あたりあたりいとさはらかにしつらひたる、いと涼しげなるに、夕風まちとるべきはしつ方についゐたるに、かつ〳〵暑さも忘るゝ心地して、簀子の端に出でて見いだせば、庭の梢どもいづれとなく茂りあひたるものから、本だちうとましからぬ程につくろひなして、このもかのもに、はかなき柴垣なつかしくゆひわたしなど、しめやかに見どころあるさまなり。

夕つけゆくほど、軒近き呉竹の下風、心もとなきほどにうちそよめきたるも、あかぬ心地のみぞせらるゝ。やゝありて、同じ心なる人、また二人三人なむきあひたる。さう〳〵しかりつるに、いとうれしくて、はかなき物語もいまひときは心ゆくこゝちす。「心へだてぬどちのまどゐは、なべてうちとけたるなむよきを、まして、かく暑きには、いかでかしこまりもおきあへ侍らむ。むらいの罪はゆるされなむ。」とて、ほと〳〵帶などもときちらしぬべし。

あるじなさけある人にて、庭のたて石などに水そゝがせたる、夕立のなごりおぼえて、木々の下枝うち靡きて、落つるしづくもいひ

しらず涼しく見ゆ。やう〳〵うちとくらくなりゆくに、さゝやかなるわらはの出できて、ともしび近くともせば、「いでや、けぢかくて、いと暑かはし。今宵は燈籠にてありなむ。この火消ちてよ。」といふ。「げにさも侍らむ。」とて、立ちていぬる程もなく、前栽の茂みにたてるに火いれたる、ほのかなるかげに、青葉の露きら〳〵と見えて、同じく吹く風も、ことに涼しくぞおぼゆる。「夏の月なき程は、庭のひかりなき、いとむつかしくおぼつかなきものなるに、このひかりなからましかば、いと物のはえなからましを。」とて、皆人めであへるに、あるじのしたり顔なるも、ことわりなりかし。

かくて、宵過ぐる程、こだかき松にほのめく影は、月出でたるならむとて、東のつま戸おし開きて待つほど、とばかりありて、いとはなやかにさし出でたるは、またにるものなく涼しく面白きには、とうろの火もいまぞむとくに消たれにたる。大かた、月は秋をこそめでたき時に、古よりいひおきたるなれど、この頃の空に、かくて待ちいでたるほどよ、たとしへなく心もすみて、物むつかしさも、こよなくまぎるゝわざになむ。

―「鈴屋集、巻之七」―

一三　初冬の時雨

かみな月のはじめ、物へゆきけるに、日いと短き頃、やゝ遠き處にしあれば、急ぎつれど、かへさはとく暮れにけり。夕月の影に、玉笹の霜の處せくおきわたしたるが、きら〳〵と見えたるなど、なかなかをかしき冬枯の野邊のけしき、闇ならましかばくちをしからましと思ふにも、入方近くかすかなる光の、いとあかぬ心地するに、空さへにはかに曇りて、山の端ならで月も隠れ、いみじく暗くなりて、風あら〳〵しく吹きぬるはげにさだめなき此の頃の空のけしきかなと見るに、はしたなくうちしぐれ來ぬれば、足を空に走りかへ

る程しとゞにぬれぬ。何とかわかねど、いと大きなる木の立てるを見つけて、しばしのかさやどりと頼む蔭さへ、いたく散りすきにたれば、雨たまるべくもあらぬぞ、いとわりなきわざなりける。しばしの程に名殘もなく霽れぬれど、月は早く入りにけり。

―「鈴屋集、卷之七」―

一四　加藤千蔭に答ふる書

まづとよ、たひらかに物し給ひて、めでたき御よはひ重ねあげ給へらむ年のはじめのよろこび、なほ八千世にと壽ぎまうす。こゝにも事なくてなむ。

こぞの冬は、ふりはへさせ給へる御ふみよ、まだきに春や立ちかへりきぬると、思ひ給へかけぬ鶯のはつ聲よりけにめづらしく、うれしくなむうけたまはりぬる。

いでやあがたゐの友とては、一とせかとりの魚彦ぬしのとぶらはれしと、むらたの春海主とこそは、一たびのたいめもし侍りつれ、これらの人々をはなちては、たゞ音にのみ聞きわたり侍る中に、君の御名はしも、ことにふじの高根の鳴澤となむ、よにひゞくなるを、今までは其の事となくて、聞えさするわざも侍らざりき。さるは、はやく御父君のみもとにまゐり通ひし藤田某といふもののつてに、をり〳〵は御有さまもうけたまはり、又近きとし、安田ぬしの物語に聞き侍りしにつけても、いとゞゆかしく、もとよりまなびの道には、なめげなれどはらからと、心にのみはむつましく、頼もしく思ひ聞えさするを、千里へだたる雲ゐのほどにて、いせの海べの友なし千鳥、故大人のなごりうちそへて、浪のたちゐに、東の空のみなつかしくなむ思ひ給へわたり侍る。近きとしごろは、しづかにこもりおはしますとか。宣長はかひなきよはひ六十に餘り侍れど、い

まだ家のなりをもえゆづりあへ侍らで、よなか曉といはず、はしりありき侍るに、ものまなぶいとまもすくなく、こしいたくくるしく侍るに、いとなむうらやましく思ひ給へらるゝ。

まことや、大人の萬葉考かきつぎ給はむとや、そはよろづよりもめでたく、たふとき御事、同じ心にいと〳〵うれしくなむ思ひ給ふる。巻のついでの事、宣長が思ひ侍るも、のたまはすると、もはら同じことになむ侍る。

そも〳〵大人の御しわざをとかくもどき侍るは、いともかしこくは侍れど、さりとていかにぞやおぼゆるふしを、さて過さむは、なかなかにかの教への心にもたがひてぞ侍らまし。よろづはつぎつぎにあきらかになりゆかむこそ、學びの道のほいには侍らめ。おのがこゝろみにかたはしかきそめ侍りつる玉の小琴といふ物、見給へるよし、もとよりいたりすくなきしわざは、御らんじどころも侍るまじきはさるものにて、人の心はいにしへのもろこし人もいひけるやうに、おもてのごとく、さま〴〵になむ侍るめれば、御心と同じきことは有りがたかるべく、思ひ給へらるゝを、もゝが一つもさもとおぼさるゝふしのまじり侍らむは、思ひ給へかけぬ身のよろこびになむ。さるを名におふなぎさの眞玉としも、宣ひかけたる御言の葉の露の光は、いとまばゆくはづかしくなむ。御かへりことすなはち聞えさすべく侍りつるを、年のくれとて何くれのいそぎにかきまぎれて、今になり侍りぬるおこたりは、をりからにおもほしなだらめてよ。かへすがへす、

うれしさはほりかねの井を思ふにもくむ手にあまる水ぐきのあと

ならしそめては、ならしばのしば〳〵に今よりはと、たのもしくなむ。あなかしこ。む月の六日の日。

—「鈴屋集、巻之七」—

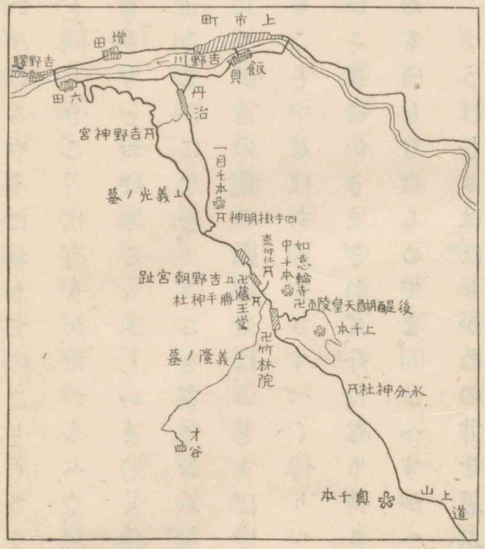
なぎさの眞玉
「名に負へる渚の眞玉拾ふともやつるゝ袖に包みあへめや」（千蔭、宣長に贈りし書簡中の歌）

ほりかねの井
「武藏野のほりかねの井もあるものを嬉しくも水の近づきけり」（千載集、藤原俊成）

八日
明和九年三月。

一五　吉野

八*日。初瀬を出でし後、雨ふらで、四方の山の端もやう〳〵あかり行きつゝ、多武の峰のあたりにてはなごりもなく晴れたりしを、けふもまたいとよき日にて、吉野も近づきぬれば、けさはいとゞ足かろく、皆人の心行く道なればにや、ほどもなく上市に出でぬ。この間は一里とこそいひしかいと近吉野川ひまもなくうかべくて、半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。

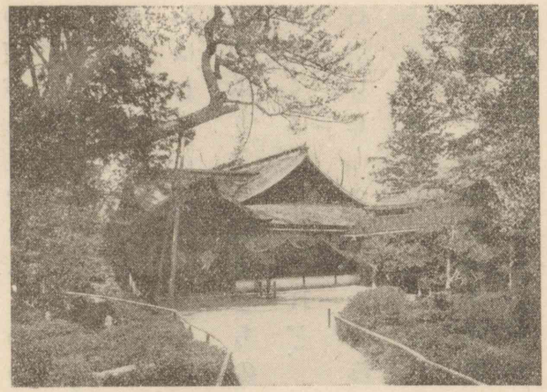


渡守は「はや」ともいはねど
「…限りなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、渡守はや舟に乘れ日も暮れなむといふに、乘りて渡らむとするに云々」
（伊勢物語）

るいかだをおし分けて、こなたの岸に船さしよす。夕暮ならねば、渡*守は「はや。」ともいはねど、皆急ぎ乘りぬ。

あなたの岸は、飯貝といふ里なり。さて川邊に沿ひつゝ少し西に行きて、丹治といふ所より吉野の山にかゝる。稍深く入りもて行きて、杉むらの中に四手掛の明神と申すがおはするは、吉野の山口神社などにあらぬにや。されど、さいふばかりの社とも見えず。この森より下にも上にも、このわたりなべて櫻のいと多かる中を、登り登りて、登りはてたる所、六田の方より登る道との行合ひにて、茶屋あり。しばし休む。この屋は、過ぎこし坂路よりいと高く見やられし所なり。こゝより見わたす所を一目千本とかいひて、大方吉野のうちにも櫻の多かる限りとぞいふなる。げにさもありぬべく見ゆる所なるを、誰てふをこのものか、さる卑しげなる名はつけけむと、いと心づきなし。

花は大方盛り過ぎて、今は散殘りたる梢どもぞ、むらぎえたる雪のおもかげして、ところどころに見えたる。抑、この山の花は、春立てる日より六十五日に當るころほひなむ、いづれの年も盛りなると世にはいふめれど、また我が國人の來て見つるどもに問ひしには、かのあたりの盛りのほどを見て、こゝにものすれば、よきほどぞと、これもかれもいひしまゝに、そのほどうかゞひつけて出立ちしもしるく、道すがら問ひつゝ來しにも、よきほどならむと多くはいひつる中に、まだしからむとこそいひし人もありしか。かく盛り過ぎたらむとは、かけても思ひよらざりしぞかし。なほこゝにてくはしく問ひきけば、「この二月のつごもりがたいとあたゝかなりしけにや、例の年のほどよりもことしはいと早く咲きいではべりつるを、いにし三日四日ばかりや盛りとは申すべかりけむ。そも雨しげく風吹きなんどせしほどに、まことに盛りと申しつべき頃もはべらぬやうにてなむ、うつろひはべりにし。」と語るを聞けば、その年々の寒さぬるさに隨ひて、遲くも疾くもあることにて、必ずそのほどとかねてはこの里人もえ定めぬわざにぞありける。


吉水神社

こゝは吉野の里に入る口にて、これよりは町屋たちつゞけり。まづやどりをとらむとて、藏王堂には參らで過ぎゆく。堂はあなたにむかひたれば、かの門はうしろの方にぞ立てりける。そのあたりに清げなる家たづねて、宿を定めて、まづしばしうち休み、もの食ひなんどして、けふあすのことども語らひ、道しるべすべきものやとひて、まづ近き

吉水院
今、吉水神社

ところどころを見めぐらむとて出立つ。この借りつる宿は、箱やの何がしとかいふものの家にて、吉水院近き所なりければ、まづ詣づ。この院は道より左へいさゝか下りて、またしばし登る所離れたる一つの岡にて、めぐりは谷なり。後醍醐の帝のしばしがほどおはしましゝ所とて、ありしまゝにのこれるを、入りて見れば、げにものふりたる殿のうちのたゝずまひ、よの常の所とは見えず。かけまくはかしこけれど、

いにしへの心をくみてよし水のふかきあはれに袖はぬれけり

かの帝の御像、後村上の帝の御手づから刻み奉り給へるとて、おはしますを拜み奉るにも、

あはれ君この吉水にうつり來てのこる御影を見るもかしこし

またそのかみの古き御寶物ども數多ありて見けれど、悉くはえしも覺えず。この寺の内にさゝやかなる屋の前、うちはれて見わたしの景色いとよきがあるに、たち入りて、煙ふきつゝ見わたせば、子守の御社の山向ひに高く見やられて、その山にも、かたへの谷なんどにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青葉がちなるぞ返す返す口惜しき。さはいへど、奥なる花は盛りと見ゆるも、なほ數多ありて、

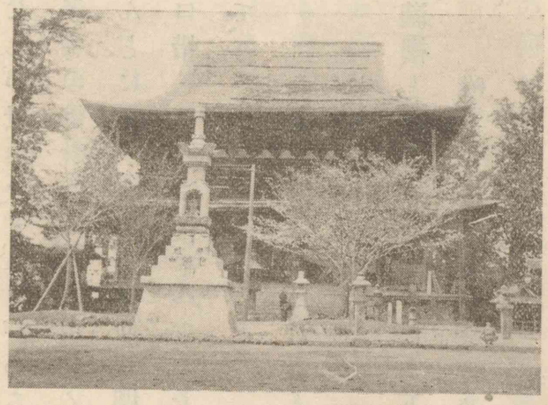
みよし野の花は日數もかぎりなし青葉のおくもなほさかりにて

瀧櫻といふもかしこにありと教ふ。

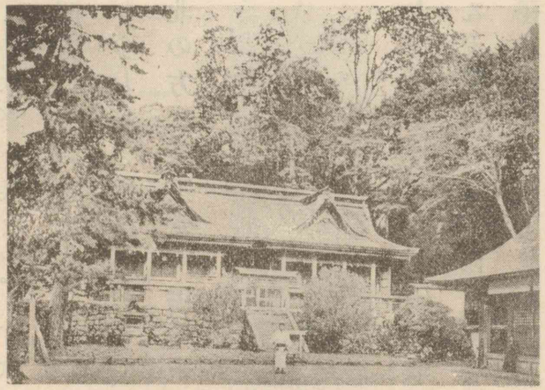
咲きにほふ花のよそめはたちよりて見るにもまさる瀧のしら絲

暮るゝまで見るとも飽く世あるまじうこそ。

さて藏王堂に詣づ。御とばり揭げさせて見奉れば、いともいとも大きなる御像の、忿れるみ顏して、片御足さゝげて、いみじう怖しきさまして立ち給へる三柱おはする。たゞ同じ御やうにて、けぢめ見え給はず。堂は南向にて、竪も横も十丈餘りありとぞ。作りざまいと古く見ゆ。前に櫻を四隅に植ゑたる所のあり、四本櫻といふとかや。堂の傍より西へ石の階を少し下れば、卽ち實城寺なり。本尊の左の方に後醍醐天皇、右に後村上院の御位牌と申すもの立たせ給へり。この寺も前の限り藏王堂の方に續きて、後も左も右も皆稍下れる谷なり。されど、かの吉水院よりは稍ほど廣し。この所はかりそめながら五十年餘りの春秋を經て、三代の帝の住ませ給ひし御行宮の址なりと申すはいかゞあらむ。ことたがへるやうなれど、をり〳〵おはしましなんどせし所にてはありぬべし。今は堂も何も造り改めて、そのかみの名殘ならねど、なほめでたく心にくきさま、異所には似ず。この寺を出でて、もとの道に歸り、櫻本坊なんどいふを見て、勝手の社はこの近き年燒けぬるよし、今はたゞいさゝかなる假屋におはしますを、拜みて過ぎゆく。この社の隣に、袖振山とて小高き所に小さき森



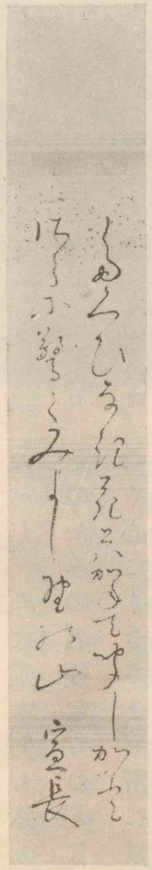
藏王堂



山口神社

たくひなき花とはかねて聞しかとさらに驚くみよし野の山　宣長

のありしも、同じをりに燒けたりとぞ。御影山といふもこの續きにて、木繁き森なり。竹林院、堂の前に珍らしき竹あり、一つ節毎に四方に枝さし出でたり。うしろの方に面白き作庭あり。そこより少し高き所へあがりて、よもの山々見わたしたる景色よ。まづ北の方に藏王堂、町屋の末に續きて、ものより高く目にかゝれり。



本居宣長筆蹟

なほ遠くは多武の山、高取山、それに續きて東北の方に龍門の嶽なんど見ゆ。東と西とは谷のあなたにま近き山にあひ續きて、かの子守の御社の山は南に見あげられ、西北の方に葛城山はいと〳〵はるに霞の間より見えたるなんど、すべてえもいはず、おもしろき所のさまなり。

暮れなばなげの

「いざけふは春の山邊にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは」（古今集、素性法師）

花とのみ思ひ入りぬる吉野山よものながめもたぐ
ひやはある

時うつるまでぞ見をる。ゆくさきなほ見所は多きに、日暮れぬべしと驚かせど、耳にも聞入れず、「暮れなばなげの。」なんどうち誦して、

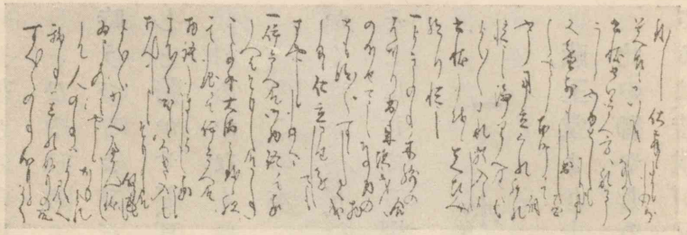
あかなくに一よはねなむみ吉野の竹のはやしの花
のこの本

かくはいへど、行くさきのところどころもさすがにゆかしければ、そこにたてる櫻の枝に、この歌は結びおきて立ちぬ。―「菅笠日記」―

一六　水分の神

藏王堂より十八町といふに、子守の神ましします。此の御やしろはよろづの所よりも心いれて、靜かに拜み奉る。さるは、昔我が父なりける人、子もたらぬ事を深くなげき給ひて、は

るばるとこの神にしも、ねぎごとし給ひけるしるし有りて、程もなく、母なりし人、たゞならずなり給ひしかば、「かつ〴〵願ひかなひぬ。」と、いみじう悅びて、「同じくは、をのこゞえさせ給へ。」となむ、いよ〳〵深く念じ奉り給ひける、我はさてうまれつる身ぞかし。「十三になりなば、かならずみづからゐてまうでて、かへりまうしはせさせむ。」とのたまひわたりつる物を、今すこしえたへ給はで、わが十一といふになむ父はうせ給ひぬると、母なむものゝついでごとにはのたまひいでて、涙おとし給ひし。かくて其の年にも成りしかば、父のぐわん果させむとて、かひ〴〵しう出でたゝせて、まうでさせ給ひしを、今はその人さ



本居宣長母勝子の筆蹟

へなくなり給ひにしかば、さながら夢のやうに、

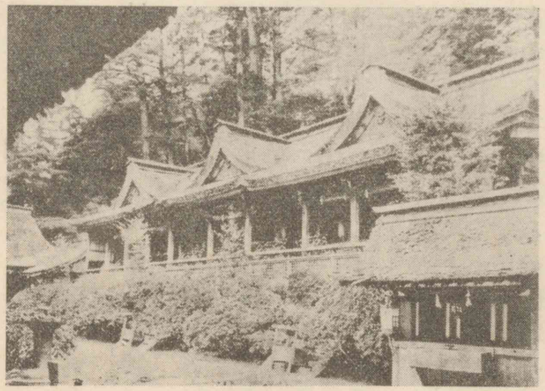
思ひ出づるそのかみ垣にたむけして幣（ぬさ）よりしげくちるなみだかな

袖もしぼりあへずなむ。

かの度はむげにわかくて、まだ何事も覺えぬほどなりしを、やうやうひととなりて、物の心もわきまへしるにつけては、むかしの物語をきゝて、神の御めぐみのおろかならざりし事をし思へば、心にかけて、朝ごとにはこなたにむきてをがみつゝ、又ふりはへてもまうでまほしく思ひわたりしことなれど、何くれとまぎれつゝ過ぎこしに、三十年をへて、今年また四十三にて、かくまうでつるも、契あさからず、年ごろのほいかなひつるこゝちして、いとうれしきにも、おち添ふ涙は一つなり。

そも花のたよりはすこし心あさきやうなれど、こと事のついで

ならむよりは、さりとも神もおぼしゆるして、うけひき給ふらむと、猶たのもしくこそ。



水分神社

かゝる深きよしあれば、此の神の御事はことによそならず覺え奉りて、としごろ書を見るにも萬づに心をつけて尋ね奉りしに、吉野水分神社と申ししぞ、此の御事ならむと、早く思ひよりたりしを、續日本紀に水分峰神ともあるはまことにさいふべき所にやと、地のさまも見さだめまほしく、としごろ心もとなく思ひしを、今來て見れば、げにこのわたりの山の峰にて、いづこよりも高く見ゆる所なれば、うたがひもなく

さなりけりと思ひなりぬ。ふるき歌に、みくまり山とよめるも、此所なるを、その文字をみづわけとひがよみして、こと所の山にしもさる名をおふせたるは、例のいかにぞや。又みくまりをよこなまりて、中比には、御子守の神と申し、今はたゞに子守と申して、うみのこの榮えをいのる神となり給へり。さて我が父もこゝには祈り給ひしなりけり。

―「菅笠日記」―

賀茂眞淵

元祿十年、遠江濱松在の伊場村に生る。三十七歳の時、京都に上り、荷田春滿の門に入り、國學を研究す。四十二歳の時江戸に出で、村田春道の家に寓す。就きて學ぶもの次第に增加し、五十歳の時、田安宗武に仕ふ。田安家に勤續すること十五年、この間に多くの著述を出し、名聲日に日に高し。六十四歳の時、日本橋濱町に居をトす。縣居これなり。眞淵は師春滿の志を繼ぎて、古學復興の爲に渾身の勇を振ふと共に、一面作家としての豐かなる天分を傾けて、文に歌に、その金玉の響を永く後世に傳へたり。明和六年歿す、年七十三。

賀茂翁家集、五卷。村田春海が師の歌、文を集めたるものにして、一、二の卷には和歌を、三以下の卷には文章を收めたり。文化三年刊行せらる。

一　隅田川に舟を泛べて月をもてあそぶ序

いつはあれど、照る月の秋のさかり、いづこはあれど、行く水の隅田川に、夕波のふた國かけたる月見むとて、唐・大和の文人、絲竹にしも堪へたるを連ねて泛ぶることあり。

賀茂眞淵肖像
（内山眞龍筆）

舟は汐のまに〳〵棹ならずして上り、岸は舟のまにまに居ながらにしてぞ移る。岸遙かに晴れて百の臺に簾を卷き、風靜かに吹きて千々の舟の帷を動かせり。あるは陸、あるは舟、あるは高き、あるは卑しき、色は波に匂ひ、聲は空になむ澄みにける。

蘆荻を分けつる國　「紫生ふと聞くみ野の蘆・荻のみ高く生ひて、馬に騎りて弓持たるすゑ見えぬまで高く生茂りて、中を分け行くに竹芝といふ寺あり。」（更級日記）

都鳥に言問ひける河　「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（伊勢物語）

古の言の葉の集　古今和歌集。

後の道ゆきぶりの日記　菅原孝標の女の更級日記。

これやこの蘆・荻を分けつる國にやあるらむ、都鳥に言問ひける河にぞあるらし。時のゆければ、かゝる都にしもなりにけることを、あるは目に喜び心に驚き、あるは醉ひなきして今をほめ、歌しのびして古をなむ語らひける。時にある人のいへらく、「わがみかどに隅田川てふ河こそ多けれ。打寄する駿河なる、大鳥の出羽なる。この武藏なるは古の言の葉の集には『下つふさのあはひ。』と書かれ、後の道ゆきぶりの日記には『相模のさかひなり。』とぞしるしける。いでや月待つほどのなぐさめに、人々この事さだめ給はむなり。」といへば、あるが中に一人あげつらふことは、「それ古の集は後の人の筆をくはへたるあり、後の日記は野らに問ひてしるすことあれば、よるべきものゝなづむべからざるをや。そも〳〵蘆・荻をや分けつらむ、都鳥にや言問ひけむ。蘆・荻は人草しげからむさがにして、鳥の名は都とならむしるしにぞありけらし。しかあれば、かゝる都の内に流るゝ川をしも絶えせぬ御代のためしにも引き、ふりにし名どころのよすがにもいふべきなりけり。」といひをはれば、待ちとりて物の音をわなゝかし、澄みのぼる月にうそぶき出でたる、いづれの處かはしかむ、いつの時にか忘れまし。すなはち舟こぎりてかしこければ、今宵のありさま述べつくすべし。たゞわれひとり醉ふ。かゝれば何の心をかいはむ。

わだつみのゆふ汐のぼる隅田川月のそらまで月も行かなむ

—「賀茂翁家集、卷之四」—

二　九月十三夜宴「橘枝直宅」歌序

秋の夜の長月十まり三日の夜の月をめづることは、ことさやぐ唐國にはあらで、そらみつ大和の國ぶりになむありける。その始を問ふに、昔亭子のみかどの、今宵の影の異なるをしも、中の秋につ

亭子のみかど　宇多天皇。

中の御門の右の大臣　藤原宗忠、その日記を中右記といふ。

賀茂祭　千早振神のみあれの今日なれはうへもくもゐの使立ちけり　眞淵

ぎなむものと見そなはし給ひ、定め宣はせけることを、中の御門の右の大臣、保延のはじめのけふのふみにぞ記しおき給へりける。しかあれば、それよりこのかた、茜さす大宮より天さかる鄙のきはみまで、高き卑しきめであへることになむなりにたる。それが中に、あやにくの浮雲を怨み、しくめる波風をわぶる折しもあるを、こ

賀茂祭

知八也夫臣可美乃氏安別鉄氣不奈連波女
守倍毛久母爲乃都可比多知家里　眞淵

賀茂眞淵筆蹟

とし延享はじめの年、いとゞ御世の秋風靜かにして、この二夜の月には稲葉の雲のとしあるよろこびのみありて、寶の鏡の隈なす塵もすうるわざなきに、わきて今宵しもいよゝ桂の花の光も勝りてなむ覺えける。

こゝに橘ぬし今宵あるじせらるれば、おもふどち來り集ひて、盃

橘の花さへ實さへ　「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜置けどいや常盤の木」（萬葉集、聖武天皇御製）

度々めぐらし、言の葉數々唱ふめり。さるは、このぬしのうみの子、今年十といふ齡にして、三十あまりの言の葉をぞつらぬなる、今宵しもいとゝとく詠みいでられたり。これは吳竹の世にめづらかなることなれば、唐・大和の言の葉にかけて、且は宿の橘の花さへ實さへあるたねを思ひ、且は霜・雪にもいや常盤ならむ生ひさきを祝ひほめざるはなし。またかゝるさやけさは、人々のもゝよの秋の行末にはいくそ度かあらむ。己が世の三十・四十の來し方には未だ見ざりけりとなむいひあひつゝ、とざさぬ今の御世にあひて、心さへ隔てなきまどゐを喜び、あるはめでさせ給へる舊き御時の始をしも仰ぎまつるなり。たゞこの折にありて、秋の夜の長きにあえぬ言の葉の、心の短きをなむ恥ぢぬる。その詞にいはく、

めでそめしその長月の今宵もや今宵ばかりの光なりけむ

―「賀茂翁家集、卷之四」―

村田春郷　村田春道の子。弟、春海と共に眞淵に就きて學ぶ。家産を春海に讓り、閑居して世を終ふ。明和五年歿、年三十。

三　村田春郷墓碑

玉川にうまし玉あり。人得がてにす。世の中に人あり。うまし人またすくなし。こゝに氏は村*田、名は春郷といふ人あり。其のさが高くしてへりくだり、おもひがねなごやかなり。そが常はや、遠つおやをまつるに、齋串のみてぐらを供へ、春秋の花をつくし、父母に仕ふるに、やとりのつくゑ物を捧げ、朝夕のうるはしみをなせども、すべてたらはぬ事をおそれ、うからやからにうるはしく、友がきにうるはし。家人けだし百たりに近し。事あるにおよべど、見直し、いひ直す神つならはしもてすれば、家人もうつしき青人ぐさにならはず、とゝのひなごびにたり。好める事は、いにしへの書をよみ、いにしへぶりの歌をよくす。ことに長歌を得たり。また鞠蹴る業を得て、其の姿うるはしく、立居みやびかなり。其のわざ好める人、皆世にすぐれたりといへり。しかはあれど、うま人のめしある時は、故をまをして參らず。さは、わざもて名をなさむことを恥ぢてなり。かれ曾祖父忠之、佛の法に入り、祖父忠友、聖のをしへをたふとみ、父春道、神の道を傳へ、春郷いにしへのみやびを得て、今に四世つぎ、世にたゝへられたり。こゝにして春郷思へらく、われ市のほとりに居て、世々富めり。富はやがてうかべる雲なり。うつろふさま何かさだまらむ。今務むべき時なりとて、市の外のなりどころにうつろひて、なりはひを永くせむ事を謀り、父母にとひ、おい人に謀りて、もろ〳〵うづなひて後、遠つおやをまつり、かたやきして定めぬ。其の深き思ひはかりある事かくの如し。時に明和のいつとせ、さ月、病ありて、なが月までおこたらず。みそぢの齢にして身まかりぬ。をちこち人皆いへらく、うまし玉こゝにしてしづきぬ。悲しきかも、此の人。惜しきかも、其の玉。あはれ。

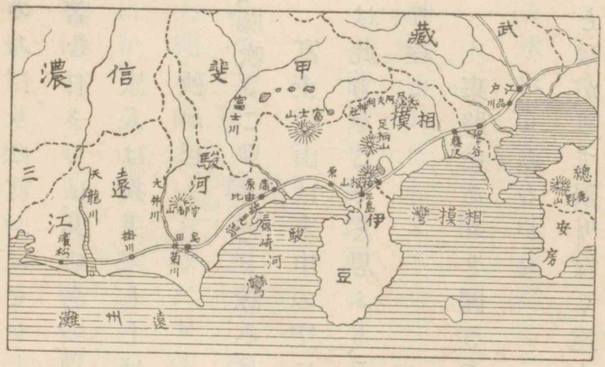
いろと春海泣きていへらく、いにし人、子なし。たゞ言の葉の殘れるあり。名代（なしろ）となすべし。其の常のありさまをば、翁が古言をもて記さむ事をこそといへり。かれ賀茂眞淵、むつましき友垣の故をもて、涙にひぢて記す。

―「賀茂翁家集、卷之四」―

四　岡部日記

あはれ、都にありつる程は、あからさまながら、年のはに故郷に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里のをちに老いたるたらちねをおきまつりて、とみの事ありともいかでか知らむ。知るともいかでかとみに往きいたらむ。今や如何なる事かあらむ。如何なる心にかますらむ。」など、人やりならぬ胸さわがれつる事、日毎にありしを、世のさがは哀なるものにて、うつたへに忘るとはあらねども、友垣も出できて、高き賤しき行きかひしけるに、二つなき心の紛れ易くて過ぐしぬ。

後の七月八日
元文五年閏七月八日。



此の秋はいざなふ人さへあれば、「いでや母をも拜み、妻子はらからにも逢はゞや。」とて、後の七月八日つとめて立出づ。此のあらましいふ頃、人々別れ惜しむとて、唐・大和の歌ひと百ばかりもあらむかし。そはこと物に記しつ。友垣の名殘なきにしもあらねど、契り置く日數幾何ならねば、先づ進まるゝ心には痛しとも思ほえず。

品川のうまやわたりは、海の面ゆほびかなり。夜の雨晴れて、白雲多く海の空にかゝれるは、伊豆のみ崎

大山　安房鹿野山。あをた　筵輿

關吹きこゆる　「旅人は袂涼しくなりにけり關吹きこゆる須磨の秋風」（續古今集、在原行平）

と安房の大山となり。「此處は袖の浦とぞいふ。」など、あをたかく奴のみだりに言ふはをかしき物から、いづくにまれ、ときあらひぎぬ著む日までは、其の名のゆかしきや。朝風いとゞしく身にしむに、

旅人は衣手寒ししばしなほこゝろしてふけ浦の
秋かぜ

「關吹きこゆる。」など詠みけむ、思ひ出でらる。

富士の山は未申の空に見ゆ。是ぞ己が眺むる方なるに、故郷人は此方をこそと思ふも、こたびは嬉し。をちつ年、あづまに來にける程に、

東路にありと聞きつる富士の根を夕日の空にか
へりみるかな

とながめて、限りなく遠くも來にけりとわびつるには變れり。

程ケ谷の宿過ぐる程、空曇りみ晴れみたゞならねば、雨づつみす

大山　相模國中郡に在り、山中に阿夫利神社鎮座。

るに、しばらくしてけしき止みにけり。藤澤のうまやに宿らむとて行くに、しなの坂といふ坂を下れば、田の上・山もとなどに、濁りたる水いと高きは、此處にしもいたく降りにけるなり。

大山は今も降りぬべき雲のふるまひなり。此の山ぞあふりの神にておはします。

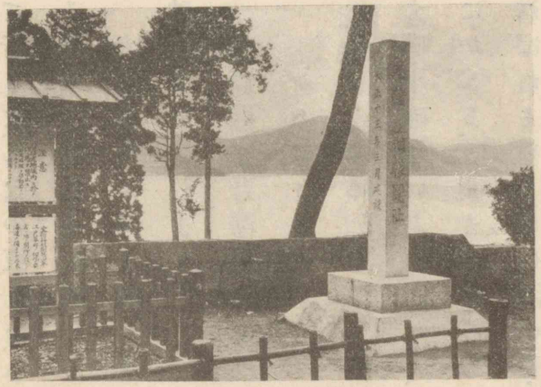
藤澤や野澤濁りてみなかみのあふりの山に雲か
かるなり

つとめて驛を立つ。夜の雨に道いと惡しくて從者わぶめり。大磯・小磯といふわたりは、よろぎが磯なるべし。夕づけて箱根山にかゝる。關までは苦しとて、畑といふ所に宿る。いと早夜寒なればねもいらぬに、瀧の音・鹿の聲打ちこめたる山の秋風、聞きあかされて立出でぬ。

ほの〴〵と明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧白く立渡

湖　箱根山上にある蘆の湖。

れるは海を見む心地す。關越ゆるほど、日さし昇りて湖*の面のどかに見渡さる。彼方・此方山をめぐれる水のつらは、三巴といふや似つらむ。蠶叢に擬したる人は誰ばかりなるや。其の後いくそばくの人か望み見けむ。此の湖にさせる聞えなきぞあやなき。



蘆の湖

けふは何がしの國より貢物送るとて、さりあへぬまで行きかひたり。古き歌などずして下るに、ふりさけ見らるゝ海山の興あるにも、過ぎし頃雨に越えし折想ひ出でらる。「すべてみ山は雨ばかり哀なるはなし。此處・彼處くゆり出づる雲の薄き濃きに、山々は面影ばかりぞみゆる。『人面より起る。』と吟じて越えつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしと見しは。」といふに、人々は「例のひが心にこそ。いぶせかるべき物好みなめり。龍に乘るらむ山人にやあつらへまし。」など笑ふ。辛うじて三島の驛に到る。古き歌に「ちゝのみの父。」と續けしは木の實にて、此の國に在りといふ人のありしかば、問ひ求むれど、見知れる人もなし。

故郷のはゝそのかげは問ひゆけどちゝのみなきぞ悲しかりける

けふは雲迷ひて富士も見えず。原の宿わたりより雨降らむとす。富士川は明日こそ渡るべきを、水嵩やまさりなむ、夜をかけてだに、蒲原の宿までいかで行かむとて、夕つ方より立迷ふ雲の脚と共に急ぎつゝ行くに、空晴れて思はざるに月さやかに出でにけり。

夜船こぐ富士の川とに霧晴れて高ねに出づる月

を見るかな

夕の雲のいざなはざらましかば、かゝる處の月は見ざらましを、心ありけりなどいひあへり。戍のはじめばかり蒲原の宿に至る。十一日薩陀山を越ゆ。何がしの湖見るらむ景色覺えて、からめいたる入江のたゝずまひなり。清見潟は中々言の葉もなし。夕つけて安部川渡る。薄々霧渡れる夕日の漣にかげろひて、駒の足搔に散りくだくる水の、水晶などわれたるやうに見ゆるは、清少納言が詞思ひ出でられて興あり。宇都の山はいとさかしかれど、昔の道にあらずといふぞ口をしき。暮過ぎて、島田の宿に宿る。明日は故郷なりけりと心急がれて、夜深く出でて大井川渡る程、ほのぼのと明けゆく小夜の中山は、朝霧分けむも珍らしかりなむとて、かちより越ゆ。懸川の宿わたり、ゆかりある方々訪れて過ぎぬ。夕つけて天龍川渡る。人々迎にとて來つゝ、老い人の事なきふし

清少納言「月のいとあかき夜、川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。」（枕草子）

先づ言ひて、いと珍らしと思ひたるけしきどもも嬉しくて、

まれに渡る天の中川中々に嬉しき瀬にも袖ぬら

しけり

くれ過ぐる程、岡部の家に至る。まことに門によりて待ちかけ給ふ。いときなき姪どもなど、馳來れども見知らぬ顏なればにやあらむ、とみにもむつれず。馴れしばかりの人々は、髮の蓬は似ずなりぬめれど、國ぶりの詞のみやしるかりけむ、何れの處よりとは問はざりけり。妻なる人はたはやすく來べからぬ故あれば、先づ子をおこせたるに、年比べて見るにおよずけにたるぞ嬉しき。誠の至れる事とて、なつかしくうれしと思へるけはひもあはれなり。常は親しからぬさへ問ひきて、日に〳〵語らふに、庭の蓬も露かわくひまのありげなり。

× × × × × × × × × × × × ×

十一日
元文五年九月十一日。

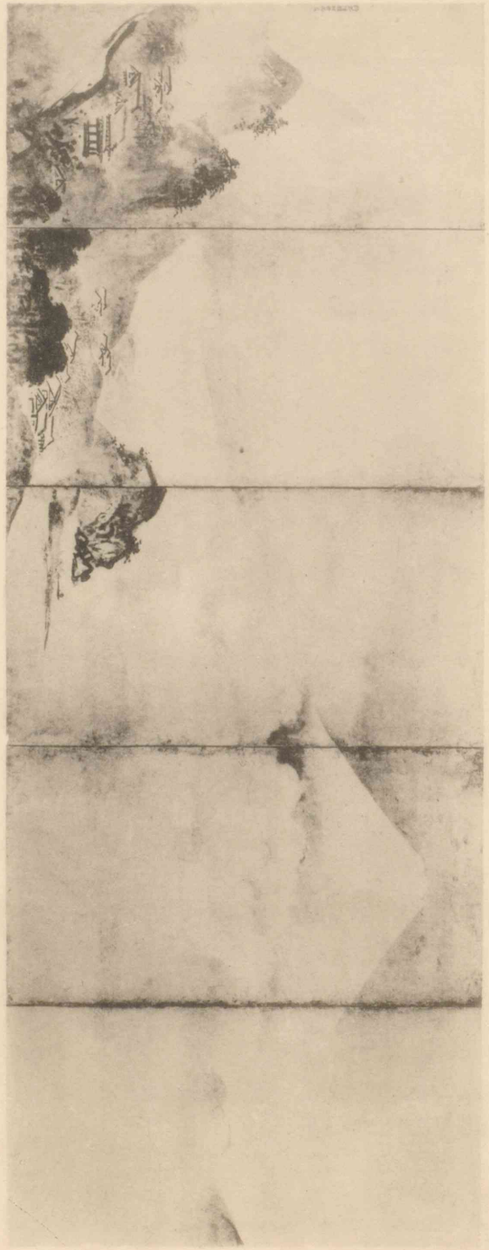
十一日、曉に立出づ。來む年また歸らむことを言ひて、

來む年とことにはやすく契れども思へば遠き月

日なりけり

海山をだに幾重とゝなく越えさからむ悲しさ、老人の悲しみ給ふに添へて、妻はらからの名殘、取集めたる我が心の內言はむ方なきに、胸つとふたがりて、送りに慕ひ來たる人々に物もえ言はず。朝ぼらけのそがひの梢なつかしく、逆さまにも乘らまくて、かへり見がちに行くに、おもひの霧はふたがれど、空いと晴れて、風も靜かなれば、天龍川に下りたちて、いと疾くさし渡すもあやにくなりや。今日は懸川の宿の、鈴木のなにがしが許にゆかりありて宿りぬ。

小夜の中山の朝霧分くる程、風立ちていとわびし。菊川の里に到りぬ。名に負ひて菊いと多かり。大井の社ゆくてに拜みて、藤枝のすくに宿る。曉深く出でて、岡邊わたりを行くに、山もとの木



（藤樹採薪翁）　圖繪見清

朝霞かびやが下　萬葉集、卷十、卷十六、などの歌に見ゆ。

ぐれに處々ほかげの見ゆるを、夜深くいで來れる里人に問へば、鹿火なりといふ。　山田の畔（くろ）におくかび、是なりけり。　山しづの思ひ運らさで、言ひなれたる詞こそまことなりけれ。　なほ谷陰ゆくての田の面に薄くきり渡れるが、中にむら〳〵立昇る煙に、「朝霞（※）かびやが下。」思ひ知られて、いと興ある曙なり。

「うつの山のむかしの道は。」と山畑にそば刈るをのこに問はするに、「知らず。」とのみなさけなげにいらふ。　にくむ人もあれど、「知らざるぞまことならむかし。　世の中にあらむとする人は、おもてをよくし、ことばをたくみにするに、そのまゝにこゝろうる事のたがはざるぞすくなき。」などいふ。

世の人のこゝろや賤が山ばたのそば〳〵しきぞまことなるらむ

今宵は十三夜なるに、清見が關にこそ宿らめと思へど、「日高し。

契るばかりの日數もはべるは。」など人々のいふに、わりなくて過ぎぬ。歌も詠みつれど、なか〳〵にてもらしぬ。くら澤などいふ坂をくだるほど、伊豆の山にやあらむ、海よりあなたの峰に月はいでたり。海の面は夕日の色のまだかすかにほへる、波の上に月の光のほの〴〵とかさなりたるは、紅のきぬに海賦のうすものの裳のひかれたらむと見ゆ。島のかげなどはすそごにもかよひて、よにたとしへなき心地するが、見る〳〵暮れはつるもをかしきを、富士のねはひとりなほ夕日のいろ雪にはえて、中空にかゞやきたるは、よそに暮れはてにけるめうつしにおどろかる。

山々はくれぬる雲のそらになほゆふ日をのこす富士のしら雪

くれはてて由井の宿にやどる。今夜ばかりはまたもあらじ、夜ふかく月に濱づたひせむとて立ちいづ。月は海ごしの山の端近くなりて、波の上は鏡の如くたひらかにあきらかなれば、三保が崎、伊豆の山々、殘りなく見わたさる。入江の村の八聲の鳥も耳なれぬ心地せらる。

しどろなる里のわらやの數みえて明けゆく月に鳥がねぞする

明けゆくまゝに、今日は富士のねに雲のちりもゐず。ゆく〳〵見むとて、馬にてぞ過ぐる。

いつの世のちりひぢよりかなりいでて富士ははちすの花と見ゆらむ

いにしへになずらふる長歌よまむとすれど、ねむたさにさだかにも續けられねば、またこそと思ひて、なかばにてやみぬ。三島にやどりぬ。夜をこめて箱根路をのぼる。

たれかしるふるさとへだつ山々を月にながむる夜

のあはれは
分けいるまゝに、身にしみかへる深山の秋風、鹿の音ながらうち吹くめるを、「聲*きく時ぞ。」とは、かゝる折こそとおぼゆ。此の山をしも越えば、故郷は空さへ見えじと思ふに、更に名殘覺ゆる明方なり。
峠の宿を過ぎゆけば、杉村のをぐらきに、霧たちこめたる、袖のしめりも啻ならず。
故郷の空さへ見えぬ箱根山こゆる驛のすゞろにぞ
うき

*聲きく時ぞ「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき」（古今集、讀人知らず）

—「賀茂翁家集、卷之五」—

五　佛足石の記

釋迦佛の御あし跡の磐、高さ一尺八寸、かみのたひらなるたて二尺五寸まり、横三尺二寸ばかりあり。みあとの長さ一尺五寸七分、廣さ五寸三分、其のみあとの四つのすみごとに花の形をゑりたり。

其のおもてに文あり。文の上下に雲形をゑり、文の左には佛の像をゑりぬ。左のそばにも文あり。これも上下に雲がたあり。
そも〳〵佛のみあとどころは其のもと天竺の阿育王の精舍のいはほの上にありしを、唐の貞觀のころ、王玄策てふ臣を天竺へ使につかはされたるに、かのあとをうつしもて歸りて、其の國なる普光寺に石にゑりたりけり。さてこのみかどのむかし、黃文の本實をもろこしへ御使とせられし時、こを移しもて來て、寧樂の右京の禪院にをさめつるを、天平勝寶元年七月に、文室眞人淨三ぞ更に石にゑりける。この故よし其のふみどもにしるされたり。かくて今は寧樂の西の京の藥師寺になむありける。
ことし寶曆十三年のやよひばかり、おのれ大和の國を見めぐりけるついでに、みづからすりうつせり。又このみあとを敬ふ心なる歌、二十まり七をこと石にゑりてそへたるあり、そをもおなじく

すりたり。いづれも千とせまりさいつ世のものゝ、猶明らかに見ゆるがめでたきにたへずしてかくしるしぬ。

―「賀茂翁家集、卷之四」―

擬古文新選　終

昭和四年十一月九日印刷
昭和四年十一月十一日發行
昭和五年十月一日訂正印刷
昭和五年十月四日訂正發行

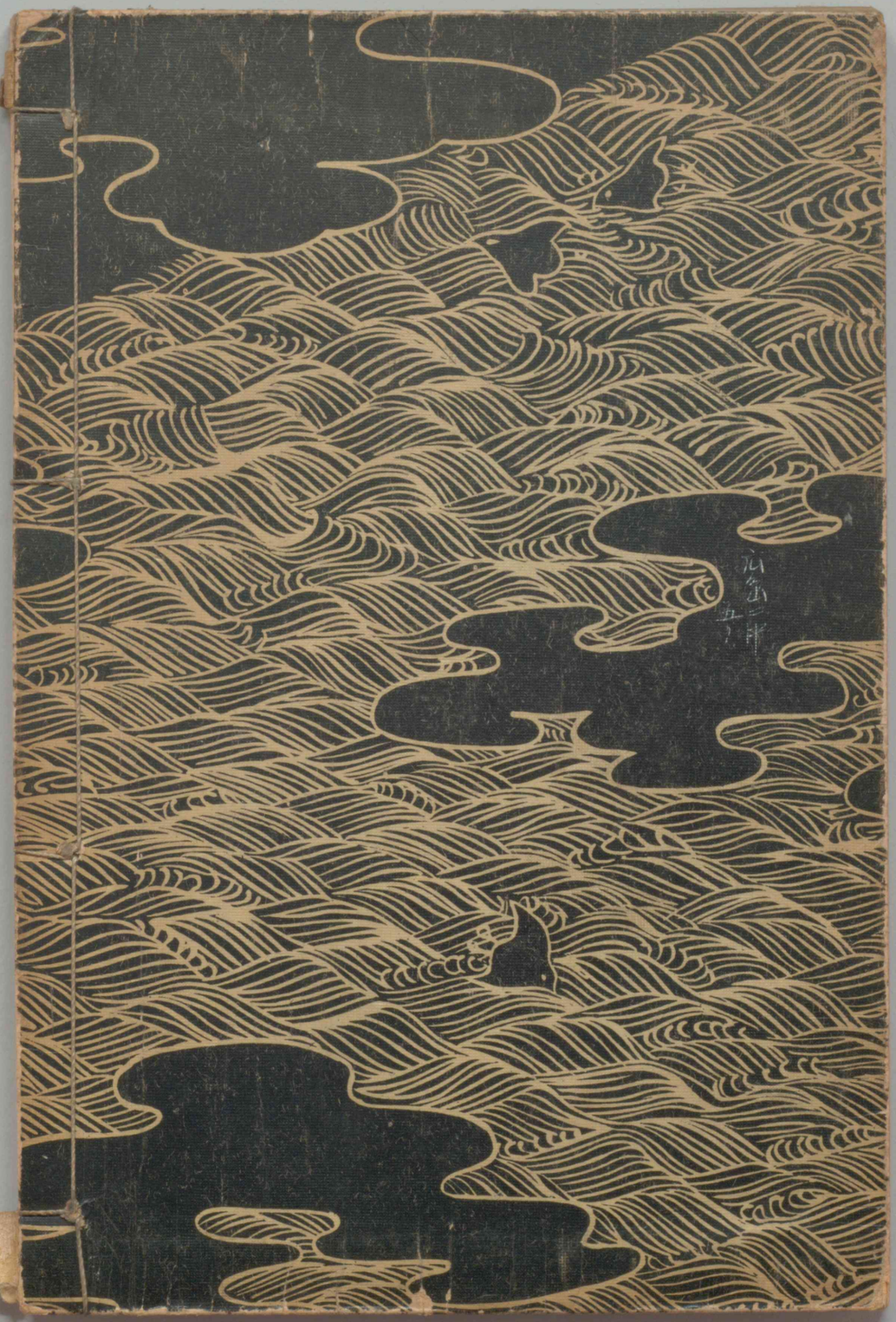
擬古文新選
定價金七拾貳錢

著作權所有

編者　千田憲

發行兼印刷者　東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地　塚田六彌

印刷所　東京市神田區材木町十番地　文勝社印刷所

發行所　東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地　右文書院
電話小石川三七二三番
振替口座東京七四五二八番

大取次　東京　六合館・大阪　柳原書店